

---

# 僕と幻想郷と召喚獣

影月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

iJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣

### 【Zコード】

Z2653Z

### 【作者名】

影月

### 【あらすじ】

バカテスと東方のコラボです。

明久魔改造、咲夜はPADじゃない（こじ重要）、文才皆無なんですが頑張ります

あと更新ですが思いつきで書くんでいきなり5話進んだりとかまばらです。

ストック?何それおいしいの?

15指定は残酷描写とうあるためつけています。

## 挨拶兼補足

初めまして影月です。

このsssはバカとテストと召喚獣と東方とちょっとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。

東方キャラ登場（頑張ります）

お話のメインはバカテス本編

過度のブレイク&amp;キャラ崩壊

メルブラ要素あり

等ございます。お気をつけて下さい。

あとキャラ設定ですが、

明久、咲夜は同じ歳、靈夢、魔理沙は2、早苗は明久の一つ下となつております。

そして最後に…咲夜はPADではない！

では次回に（逃亡）

## プロローグ1（前書き）

振り分けテスト用の自宅編です。ではどうぞ

## プロローグ1

「ンンンン...」

「...ひ...る。...久...てば...」

「つ...ん?」

「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」

「ふ...うあああ...なんだ...妹紅か...どうしたの?」

朝、なにせり呼ばれたので起きてみると、田の前に妹紅がいた...

彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まあホントはまだ色々とあるんだけど、それはのちほど。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう?

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思つてな。幽香もいるし早く着替えてこいや」

「え、あ...うん、わかつたよ」

「...一度寝すんなよ?」

「しないよ!?」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替へよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい!!

制服に着替えて(間違えても女子の制服じゃないからねー?)リビングに行くと、

「あー、明久おはよー。今日は起きるの遅かったわね

「幽香おはよー」

声を掛けってきた少女（作者「え？少女（ピチュー）」）なんか電波が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。

実際は「う」と、彼女達は「幻想郷」と「ここ」とは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけないらしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより・・・

「なんで今日は遅いってわかったの？」

「そこの花から聞いたのよ」

「あ～なるほど」

花から聞いた…聞き様によつてはおかしな発言だけど事実である。彼女達は「～程度の能力」というものを持っており（人間でも持つている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」その名前の通り、花を操つたり、会話したりできる。

「よし、じゃあ～」飯作るけど、何か～要望とかはある？」

「～お任せする（するわ）～」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こつしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかつた…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…



## プロローグ1（後書き）

うん… ああ ああだ… オー

読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？

1つけてほしい

2いらないかな

期限は4日ほどでお願いします。

## プロローグ2（前書き）

テスト時ですね～ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です  
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行っておりオリジナルで  
東方儂月抄と似たような事件も起こっているということになつてま  
す。

なんか自分で首しめそう…

## プロローグ2

s.i.d.e 明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書けてないだけです。（私を見ないでえええ、てかメタるなあああb y作者）また電波が…ま、まあテストに集中しよう…

ガタツ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん…？大丈夫…？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生…？体調を崩してるのでその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します……」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言つて、教卓に戻らつとする教師。ちよつ、まさかこの教師倒れた人間に自分で保健室に行かつて言つのかー?

「…………しつれい……しま……あ……！」

「……？」

教室を出よつとしたところで、姫路さんがこけそうになつたのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫? 姫路さん? ほら、掴まつて、保健室まで連れて行くから

「吉井くん……でも……」

「気にしないで」

さすがに、ほつとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている! ……早く席につけ! ! !」

「こんな状態の人を放つておくなんて出来ません! ! !」

「貴様も、無得点にするぞ! !」

「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になつたほうがましです」

「待て、吉井貴様! !」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちょっと」と「めんね?」「え?……／＼／＼／＼／＼!？」

ちょっとあれだけ抱えて（俗に書く、お姫様だつこ）行ひへ。

s i d e 明久 e n d

s i d e 妹紅

やっぱ、明久だよな。  
自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたらし  
な…。

(さへてどうしようかな…)

明久は無得点だし、あいつがいないと…行つてもつまらないしな…  
幽香もそうみたいだし…  
いつその事名前無記入で出すかな?

「チツ、肩が…」

そつ考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まつたく、あのバカの考えてる」とはわからん。ましてやあの肩  
“ときが私を侮辱して…」

…「ふ、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタツー……』』

あらへ、音が一つ? 気になつてそつちを見てみると、すつゞく笑顔の幽香が…なるほど考へてることは同じことだな…

「?.何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか!?.」

なんか言つてゐけどまあいい…

「とりあえず…」

「ええ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち!?.」

「「最低な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『『アーヴン……』』』

「げふ!?.」

「じゃあ、私も退席しますね」

「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハア…

s.i.d.e妹紅end

s.i.d.e明久

なんか教室からすゞい音がした気が…気のせいだな…

よし着いた。

「失礼します」

「あら？ 明久君、どうしたの？」

「永…八意先生いたんですね。すいません急患です」

「そう、じゃあそこのベットに寝かせて」

彼女は八意 永琳。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みみたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」「そうですか」

「でも、明久君？テスト中じやないの？」

「実は……」

とりあえず、さつきあつたことを永林に話した…

「ふうん…その先生って何て名前？」

「え？ 髪先生です」

「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」

「もうテストは受けれないし妹紅と幽香を待とうかと」

「あり、それならお話しましょつか。今暇なのよね」

「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聴いたところ、永琳が一層笑っていない笑顔になつたことだけはここに記そう。  
帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（一人は+2時間）説教を食らつた…

## プロローグ2（後書き）

おまけ  
「でもさ慧音、その教師明久のこと悔聴したんだよ。」「?どうことだ?」「あ～それはね（幽香説明中）……つとこいつ」と「…………」  
「もう、でその教師の名前は?」「～先生（慧音切れてるな…）」「（切れてるわね…）」「『フルフルガチャツ』  
「ああ、永琳か?ちよづじよかつた…実は…とこいつことだから頼む」「～（い）愁傷さま」「」

後日、この教師は首になつたそつだ…（妹紅談

## 第1話 朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

## 第1話 朝の会合

4月…

今日は文翔学園の始業式である  
その頃明久は…

「ンンンン…」

「…ハ…ん…ン…ン…」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなわ…」

「うん?ふあ…あ、幽香おはよっ」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう?

「…ねはよう。といひでそれ、何? (ニイシ)

「え? (隣を見る)…うんまあ、理由言いたいから聞いてくれる?」

「まあ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠つていて、遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃつたんだろう…

「実は昨日モソン ン3して…」

「…何時までしてたの?」

「えつと3時くらいまでは記憶がある」

「…」

「…」

「はあ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって嘱つて

るでしょ…」

「あははは…」めぐ…」

「まあいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えつ・・・・・」

「それと…ねとは話は別よ (ニイシ)

「ハイ、ワカリマシタ。」

「うして僕は死亡フラグを立てた…

「明久」めんな。寝くなつちやつてそのまま寝ちやつた…

「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけ  
ましだよ…」

朝ご飯を作つてゐる途中、起きてきた妹紅が謝つてきた。でもみんな抱き癖があるのでどうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてくるし

「あはは、まあ明久なら大丈夫でしょ」

「ひどいな～僕は普通の人間だよ？」

「…普通の人間が砲撃とかを切つたりしねえよ…まあかつこいけどせ…／＼（ボソッ）

「へ～どうかした？」

いきなり顔赤くしてびついたんだが…

「いや／＼何でもない／＼」

「そう？…といろでわ…」

やつぱりこれは言わなきゃだよね…

「妹紅…やつぱり男子制服で行く気？」

「そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…  
「ん？あ～、うんだつてスカートって慣れなくて…それに似合わないし」

「そうか…僕は似合うと思つけどな～」

「あははは／＼まあその、ありがとう」

「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ～

「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝つて」

「わかった」

さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

「おはよう、吉井、藤原、風見」

校門前でスーツを着た先生に出くわした。

「おはようございます、て…西村先生」

「おはようございます、鉄人」

「おはようございます、西村先生」

「ああ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかつたか？あと藤原、西村先生と呼べと言つてるだろう」

「気のせいですよ、先生」

「え？ かつこいいと思うけどな…鉄人つて」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」

結果が書かれた封筒を鉄人が僕と一人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。

「吉井、先生はお前の行動は立派だと思つ。結果は残念だつたが…」「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、Fクラスだつた。まあ仕方ないよね、途中退席だし

「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」

「あいつが明久のことをバカの肩呼ばわりしたからだ（したからよ）」

「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかろう…」

「うつ…それはたしかに…」

「言いごたえ出来ないわね…」

「まあ今日は罰も受けているから処分はなしだ… 吉井と上白沢先生たちに礼を言つとけよ?」

「…はい」

「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」

「んつ、そうか。」

あまり話しこんどると遅刻しちゃうしね

## 第1話 朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。あと生活ですが、ゲームは買つけど日常に余裕があるくらいには節約しています。

暮らとして

幽香 明久 慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

## 第2話 AクラスとFクラスの「コラ（前書き）

え？ P V 2000超え…？ 頑張らないとだな…

## 第2話 AクラスとFクラスの「コラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていいこうぜ」

始まりは妹紅のこの一言だった。

「確かに時間あるし、見ていいこうか」

「そうね」

少年少女達移動中…

「……」

「アハハハ…」

「何よこれ…」

目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…

「無駄にお金のかかった教室だね…」

「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！」

「格差社会つてやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、やっぱりあの先生が担任なんだ…」

「私の先生苦手だな…」

「私、間違つてもAクラスじゃなくてよかつたかも、って今実感したわ…」

これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」「

「？？？？？？はい。」

名前を呼ばれ立つたのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者か……」

「え？」

霧島翔子は一年生の頃からその姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断つてきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「いや、霧島さんには同性愛者じやないかつて噂があるじやない？」「あ～確かにそうだな」

「それがどうかしたの？」

「いや……僕にはそう思えなくてね……もしかしたらずっと一人の男子を想い続けているのかもしれないと思ってね」

「そう……なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）……（ボソッ）」

「？」

「そろそろ教室行こうか」

僕たちはFクラスの教室に歩き出した。

この時僕は、僕たちを見ていた銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねえ……僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」

「明久、現実を見てくれ……私だって逃避したいの我慢してるんだから……」

「これは……ひどいわね……」

今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だつた。

「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ。」

「そうだな……」

「そうね」

そつ言つて、僕は教室のドアを開いた。

『ガラツ』

「おはよ」「さつさと席つきやがれ、蛆虫やろう」「う~

なんだらう~、この教室。入つた第一声罵倒だつた~

「つて雄一なんで教卓に立つてるの?」

「そりゃ担任が「蛆虫やろうとは言い根性してゐるな(わね)……」「え?」

罵声を浴びせた少年、坂本雄一はその方に目を向けた。

そこにはもこたつ…妹紅とこり…幽香がすごい笑顔で立つていた…

「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」

「また、それはお前たちじゃなくて明久のこと…」

「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」

「覚悟出来てるんだろうな(わよね)?」「

「ち、ちょっと待つてくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから? ? ? ? ? ?あ、明久!。助けてくれ!。」

雄一が助けを求めてくる…仕方ない…

「一人とも…」

「「なに?明久」

「あとでやつてもかまわないから、今は席に着こり~」

「「そうだな(そうね)」「

「ち、ちょっと待て明久! ? 見捨てる気か? !」

雄一は必死に助けを求めるが、

「だつて原因雄一じやん」

僕は切り捨てるにした。



## 第2話 AクラスとFクラスの「コラ（後書き）

次回のお話は？

とうとう始まつた本編、雄一のおとしめようとする策略に明久はどう対抗するのか？

お楽しみに（大ウソです

### 第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（前書き）

明久の紹介じゅうじょうかん…あと最初の担任変更b

### 第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」

「あ、すいませ…つて慧・上白沢先生…」

後ろから声がかけられたので振り返つてみると、そこには慧音が立っていた。

彼女は上白沢 慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている

「あ、慧音おはよう」

「藤原さん、学校では上白沢先生です」

敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）  
…上白沢慧音です」

「なあ、明久慧音どうしたんだ？」

「さつき黒板見たときチョークがなかつた…」

「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」

ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチョークを取りに行つた。

「うおおおお…！…すげえ美人だ…！」

「不思議な帽子をかぶつてるが、逆に美人度が増してる…！」

戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いてるよつにも見えたけど気のせいのはずだ…）

「えつと、何がありますか？」

「付き合つてください…！」

「…異端者には、死を…」「…」

「すいませんでした…！」

「「ばかばつかね」」

「…ハア」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

「あと言つておくが、わしは男じゃ」

「「「な、なんだと！？」」「」」

みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持つていてるがまあいいだろつ。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、  
「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが  
苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニー・テールで勝ち気な印象を与える少女—島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です 」

『シユツ…』（幽香がペンを投げた音）

『ガツン…』（慧音がチョークで相手…はじいた音）

「え…？」

呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げなによつて」

「考えとくわ」

「幽香…」

「…わかつたわよ…」

僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に  
関しては投げる前に止めた）

「島田さんもそのよつな発言は控えるよつてしてくださいね（二口  
ツ」

「は、ハイ…（あの一人…吉井どじうこう関係かしら…）」

島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだり…

「あいつには氣をつけなきやだよな」

「そうね…」

「どうしたの？一人とも」

「「氣にするな（気にしないで）」」

2人はそれぞれ笑顔で言った。

「・・・・・です、よろしく」

次は妹紅だな

「藤原妹紅です、男子制服を着てているが女なんであしからず」

「なるほど木下みたいなものか」

「じゃから、わしは男じや…！」

うん…もう突っ込むまい…

「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」

「「「異端者には、死…」」」

「明久に手出したら…」」

『バギヤンツツツ…』（ちやぶ台が碎け散る音）

「 いじめるからよしへ」

「 「 「 「 イエス ヴェー 」 」 」

「 も、妹紅……」

「 だつて明久に……」

「 それもだけどちやぶ台……」

僕らの前には碎け散つた妹紅のちやぶ台……

「 …」

「 明久、ちやぶ台一緒に使わせて……」

「 別にいいけど……」

おつと次は僕が……うんこの微妙な空氣どひょひょひ……仕方ない……

「 一「ホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

…ボケよう

次の瞬間、

「 「 「 ダアア――リイーーン――。」 」 」

野太い男の大合唱。

「 (言えるわけないだろう／／／／)」

「 (明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら?)」

「 (何言つてるんだ、あいつは／／／／)」

やばい、吐き気が…空氣を変えるためとはいへるんじゃなかつた…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう?

「 ??????失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願ひします。」

さあ気を取り直して次は幽香だね

「 風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ

ふう、普通だ…

「あと、明久の幼馴染でもあるわ  
すつごい笑顔で言い放った…やつぱりこの人だ…僕が困るところ

をそんなに見たいのか…？」

「くそ、なんで吉井ばかり…？」

「あんな不細工が…」

うわ～みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…

「あと、明久に手を出したら…」

?やばつ…?

『「ウツ！…！」（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）

『「バシッ！…！」（幽香の手をあわてて明久が止めた音）

「どうしたの？」

「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…で  
も手加減してたみたいだね…）」

「…仕方ないわね…「あの、遅れて、すいま、せん。」…」

「…え？。」「…」

全員がその声の方に目を向けるとそこには一人の女子生徒がいた。

### 第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（後書き）

さて机が一つ犠牲になるところでした。  
慧音の頬の血は氣のせいさ…（ハハハ  
ちなみにチョークとペンは相殺で粉碎しました。

## 第4話 理由と試験戦争（前書き）

PV20000ついでいたいがにせも「うわー0000行きましただ...

## 第4話 理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそつだらつ。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。

走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちよつどよかつたです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はいーあの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持つ少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっー質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によつては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしない

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどが高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだらう。

「そ、その？？？？？？振り分け試験の時に高熱を出してしまってして？？？？？」

やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…（アローラ2参照）

「明久…」

「大丈夫だよ妹紅ちょっとね…」

いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…

すると先ほどの姫路さんの発言に

「そりいえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あればむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「「「異端者には…」昨日私は明久の家に泊まつてたからあり得ないな」「ちよつ、妹紅！？」…チクシヨオオオオオオオオ…！！！」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願ひします！」

そう言つうと瑞樹は明久と雄一付近の空いてる席に着いた。  
「き、緊張しました～」

そう言つて瑞希が卓袱台に突つ伏した。

「あのさ姫「姫路」…」

体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやがつた…

「は、はい。何ですか？え～と…」

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで体調もう大丈夫なの？」

「よ、吉井君！？」

声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだか…ちょっと悲しい…

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ…」

「そうね、女性に向かつて蛆虫つていう奴よりははるかにかつこいいわね」

「うん、ゴリラよりは絶対かつこいいな」

「うぐつ・・・・ま、まあ確かに見てくれば悪くないな。そういうば俺の知り合いにも明久に興味を持つてる奴がいたな。」

「それって誰ですか！？」

「雄二が言つと嫌な予感しかしないな…

「確か久保ーー」

「久保？」

「利光だつたかなあ。」

久保利光一（性別 オス）

「うん、だらうと思つたよ…

「…（ホツ）

「ゴリラ…」

「え…」

「覚悟はできてるか（わよね）？」

「ちょつ…？」

「ほりせー、静かにしなさい」

「あ、すこませ…」

『バキッ、パラパラ…』（教卓が残骸となつた）

「……ちよつと、替え持つてきますね（あの学園長じつシメテくれようか…）」

「あ、手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待つてください」  
さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…

「……雄一、ちよつといい？」

「ん?なんだ?」

暇になつたからか欠伸をしている雄一に声をかける。

「ここじゃ話しくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」

「雄一この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない?」

「…………何が目的だ。」

「雄一が警戒するように田を細めてこちらを見る

「何がつて、姫路さんと妹紅達のためだよ」

「……」

「あの教室じや体調崩すのは田に見えてるからね」

「お前：本当に明久か？」

「それどういう意味や!?」

「まあいい明久と言つてゐる

הַנְּבָאָה בְּעֵדָה וְבְמִזְרָחָה וְבְמִזְרָחָה וְבְמִזְרָחָה

ମୁଦ୍ରାକାର?

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

-  
?  
?  
?

先生も房へてきだし教室に入らそ  
まあいしたぞ

「ではクラス代表の坂本君、最後にお願いします」

「雄一の番になり、雄一は教卓に上がった。目立たがりだね」雄一  
「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに

「じゃあゴリラで

妹紅

「一所で誰に一つ覽きたい。」

小説世界

## 古く汚れた座布団

## 薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい  
が・・・・不満はないか?」

「 「 「 「 大ありじやあつ ! ! ! ! 」 」 」 」

Fクラス魂の叫びである。ちょっと耳が痛い…

「だろう?俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・」  
スはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つ。」

いつして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう...すこく不安に感じる...

## 第4話 理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ？」

「うん？あ～試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」

「／＼／＼／＼／＼」

「？」

## 第5話 戦力と観察処分者（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・  
（「ふふふふふふ）・・・・・・・・  
P V 5 0 0 0 超え・・・だ・・・と・・・?  
・・・・・・・・・・・・・・

## 第5話 戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思つ……」

壇上で自己紹介をしていた雄一のいきなりの提案。だが、いきなり言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない。」

「もこたん付き合つて」

「断る」

「ゆうかりん罵つてください」

「……シニタイノカシラ？」

「うおおおおおおおおおおおおお……！」

何だろう、力オスだ…

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思つてくれてい。

しかし雄一の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。片や2学年の成績が悪かつた人たちが集まつたFクラス。片や2学年の成績上位の人たちが集まつたAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる！」

しかし雄一は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放つた。提案した僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか？

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃つていいからな。今からそれを説明してやる！」

そうゆうと雄一は少し間をおいて、ある一力所を見た。

「土屋。畠に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

で「じつちに来い」

「.....！」（ブンブン）

「は、はわつ！？」

「あらあら……」

「ゆ、幽香？……」

「?どうしたの明久？覗かれてないわよ？」

「.....くつ」

「いや、よく手を出さなかつたな～って……」

「…すぐに切れてると迷惑かけるもの…」

「そつか…」

まあ話は戻してつと、土屋は畳の跡を隠しながら雄一の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者だ」

「.....！」

雄一の発言に、クラスのどよめきが走る。

彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムツツリーーとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。

「ム、ムツツリーーだと！？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」

「だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ…」

「.....」

まあ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思つよ  
友人として

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだつて、その力は  
知つてゐるはずだ」

「えつ？ わつ、私ですかつ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだつた！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらない」

「あと風見幽香もAクラス並みの点数点数保持者だ」

「そうだ！！幽香様がいた！！」

「ゆうかりいいいいいいん！！！」

「明久…ねえあれヤツティイ？」

「…ダメだからね？」

「藤原妹紅に關しても、古典、歴史関係はAクラス並みだ」

「…「もこたくーん！…」「…」

「幽香の気持ちわかるかも…」

「アハハハ…」

「木下秀吉だつているし、俺も当然全力を尽くす」

Aクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄一は…？

「坂本つて、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人もいるつて事かよ？」

「もしかしたら、やれるんじやないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

やっぱ雄一は人をまとめるのがうまいな…。いつこうといは悪友として認めてるんだけど…

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言があるね…。

静まりかえる教室。なんで僕の名前を言つかなあ。

「誰だ？ 吉井明久つて？」

「知らねえよ。」

雄一の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。

「そりゃ、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」

雄一は僕を指さして言わなくともいい」とまで言った。雄一の奴・

・

「…………それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ?」

まあ、普通そういう評価だよね……

「ああ、学年1のバカの屑だ」

そこまで言つたかこの「ゴリラ」…

「ほう……ゴリラ……そんなに燃やされたいのか?」

「そうね……肉片にして花の肥やしにしようかしら……でも花がかわいそうね……」

「し、しかし明久は教師の許可をもひつて俺たちより召喚獣扱つてる分操作技術だけなら学年1だ」

「それつてすごいのか?」

「ああ、盾くらにはできる」

妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言ひ方つだな……

「これだけの有名人が揃つてているんだ。お前ら、勝つて当然だろ?」

「そうだ! これだけの人物がいるんだ! 絶対勝てる!」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じやない!」

「そうだ! 僕たちに必要なのは座布団じやない! リクライニングシートだ!」

まずは俺たちの力の証明としてロクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ!?

「「当然だ!」」

「ならば全員筆を執れ! 出陣の準備だ!!」

「「おおおおおおつ!」」

「俺たちに必要なのは、卓袱台じやない! Aクラスのシステムでスクだ!」

「「うおおおおおおおおおおおつ!」」

「お、おー・・・・・・・」

雰囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。

何だろ？…僕には不安しかないよ…

## 第5話 戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…

ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは20%くらい  
とします。

思いつき次第次話を投稿します。

第6話 宣戦布告といつこ（前書き）

幽香様降臨

## 第6話 宣戦布告といひ

「明久にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもうづ。無事大役を果たせ！」

「待つた雄一。下位勢力の宣戦布告の使者つて、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」

予想的中か…

「大丈夫だ、騙されたと思って行つてみる。俺は友人を騙すような事はしない。」

「いや、よく騙すでしょ？」

「…じゃあ私が行こうか？」

「まで藤原、お前が行つたら…」

「だつて危険はないんだろ？それなら問題ないじゃないか」

「そ、それは…」

はあ、いくら嘘だつてわかつても妹紅をそんなどこに行かせたくないしな…

「わかつたよ…じゃあ僕が行つてくるよ」

僕は宣戦布告の為に教室を出た。むつむつませよう。

s i d e 妹紅

「さすが明久だな。簡単に騙されやがるゴリラがクククと笑つてやがる…やつぱり…

「やはりそんな魂胆じやつたのか、雄一…よ

「それ以外何があるんだ、秀吉」

ため息をはきながら木下はゴリラに言つた。やつぱりこいつ燃やす

べきかな…でも

「だつたら残念だったな、ゴリラ

「？ 何がだ。あとその呼び方はやめろ」「だつて幽香がついていつたからな」

「?.どういう意味だ？」

まあ、明久もいるしそこまでしないだろ?。

s i d e 明久

さてDクラス前に到着した…

「待ちなさい、明久」

「あれ？ 幽香どうしたの？」

「私も行くわ」

本当は断りたいところだけど、まあ危険になつたら庇えばいいか…

「失礼します」

「？誰、君」

ちょうどいいや

「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」

「いいわよ、平賀君」

「？なんだい」

「あ、えつとDクラスの代表ですか？」

「そうだけど…」

代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さつさと書いて帰る…

「えつとFクラスはDクラスに対する宣戦布告します」

「え？」

そりや驚くよね…

「おいお前ふざけてんのか？」

Dクラスの男子だらう…いきなりこちらを睨んできた。

それに従つて複数人立ち上がつてるし…ハア…

「てかさ、こいつって確かに観察処分者じゃね？」

『ピクツ』

「あ～あのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』

「そうそう、人間の肩の代表」

ブチツ

61

「じゃあかたづけても問題な「ねえ、貴方達…」なんだ?」「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの?」

「ミソチー、主に、聞いてるばあや」

「あ、お詫びします。私が間違ったことを思って」

我慢ならないの」「えっ、僕つてものなの?」「えっ、え?」

「と二つひとで……こい声で騒いてね」

卷之三

卷之三

「やつぱりか」

「…ビルで何をやるんだ？」

「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけ

「おまナニ?」

「USIC（アルティメットサディスティッククリーチャー）、あいつの通称だ」

「え？ だが学園ではそんな……」

「基本明久が押さえてたからな……だが堪忍袋も切れたんだろ？、おもにお前が原因で」

「…」

「雄二」としてはやつきの悲鳴は明久のものであつてほし！と思つたんだろう…

するとドアが開いて…

「お、下ろしなさい／＼／＼／＼」

「下ろしたらまた暴れるでしょ？」

明久が幽香をお姫様だつこして現れた…いいな…

side 明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…

「大丈夫か？明久」

「うん、まあ幽香が暴れたので助かつたよ…止めるのに時間がかかつたけど」

「吉井！」

島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！！  
「ちょっとさつきのどういうことか聞きた」「それより前に放せ（放しなさい）」「わ、わかったから首掴まないで…」

「大丈夫か？明久よ」

「秀吉…うん大丈夫だよ」

なんか向こうで「ざ」ざが起じてるけど無視だ…

「それより坂本君、貴方…」

「よーしー ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋上に行くぞー」

あ、逃げた。まあ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…  
はあ、先が思いやられる…

## 第6話 宣戦布告とつら（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほつ…忘れるとはい一度胸だな…」

え？慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ！！！」

いやあああああああああああああああ…！…！…！

## 第7話 ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。

あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね～あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

## 第7話 ハーティング

「…………（サスサス）」「ムツツリー」。覗いてた時の畠の跡なひもが消えてるよ。」「…………（ブンブン）」「いや、今せら筋定されてもムツツリーが止なのは皆知ってるから」「…………（ブンブン）」「…………（ブンブン）」「いやそこまでバレてるのに筋定し続けるなんてある意味凄いと思つ」「…………（ブンブン）」「何色だつた？」「姫路が水色、風見が見えなかつた（クツ」「いやそこまですらすら言えてる時点で……」「？私がどうしたの？（一ノタ）」「次こそは……」「明久じやないと無理よ」「え？」  
ナーライライダスンダ」「ヒトハ」「だつて明久、お風呂一緒に入ったことあるじやない（一ノタ一ノタ」「うん……ひじですねわかります〇」「何だと？」「いやセ「吉井、どうい「はいはい話は最後まで聞いひね」ちよつ  
はな……」「まあ小さこ頃の話だし、それ言つたら私だつてあるしな。露天街  
あるし」「妹紅……それ底えてない……」「皆の衆ここはどこだ？」「「「「審判の法廷」「」「」「男とは……」

「『愛』を捨て『哀』に生きる者成つツー。」

「これより審判を行ふ」

ハハ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に…

簡潔にのへたまえ

ツ !

うわ……変な黒い集団が……「ヨキ」を思い浮かべてしまつた……

「とにかく、こいつはいい」

「N」消えずあればどう

え、ああああああああ——」

屋上に出て、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる。...  
ムツツリーーー 努力はいいけど、スカートの中を覗いつと頑張るの  
は珍しかと...

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄一がフロントの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各自その辺に座る。

「うん、一応今日の午後に開戦予定と告げてきた」

「それじゃ、先にお匂い飯にて事ね？」

「明ス、は」  
「そうなるな。だからじいかりと腹[レ]しらえしとけよ」

幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ? なんで

「台の上に忘れてたわよ？」

「あ、そうかありがとうございます。危うく飯抜きになるとこだつたよ」

「あの……」

「どうかしたか？」

「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど……」

「「そりゃ、明久が作ったからね（からゆ）」」「

「まあ、たまに作つてもうつたりしてるしね」

「そうですか……」

あれ……何だろ？ 気のせいかな？ 今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じたんだけど……。

「で、どーも一事なのよ吉井？」

「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」

「いいからせつと質問に 待つて藤原さん、ウチの首は一度曲がつたりしないから勘弁して欲しいんですけど……」

「だったら、とつとつその殺氣を引っ込めて腕を放してもうつつか？」

「つーか明久お前料理なんてできたのか？」

「それってどういう意味さ」

「お前去年、飯食つてなかつたじゃねえか」

「一時期、毎飯を水と塩で乗りきつてた事もあつたしのう」

「…………舌が肥えてるとは思えない」

「やうね。絶対にあり得ないわね」

「うわ……ひどい言われようだ……まあ事実そんな時期もあつたけど……とりあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そう……（

ガクガク

「すご~くおこしいわよ？」

「そうだな、私達もよく味見たのんじる」

なんか褒められると、少し恥ずかしいな……

「あの、吉井君」

「ん？」

そんな中、やつさまで考え方をしてた姫路さんが口を開く

「宜しければ私の弁当も食べててくれませんか？」

「え、どうして？」

「是非吉井君に味見をしてもらいたいんです」

「いつ？」

「明日のお皿で良ければ

「つーん、まあいいけど」

問題はないかな？

「…………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、監さんにも…」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じやなかつたら」

「ああ、それは楽しみじゃの！」

「…………（口ク「ク）」

「…………お手並み拝見ね」

僕は小物系作つてくるかな…

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そつか

あ、そーいえば試合戦争のミーティングやつてたんだつた。すっかり忘れてた。

「雄二ーよ。一つ氣になつていたんじゃが、何故Dクラスなんじゃ？  
段階を踏んでいくならEクラスじやらうし、勝負に出るならAクラ  
スじやらうし…」

「そういうえば、確かにそうですね」

「坂本君の事だから、何か考えがあつての事だと思つけど」

「まあな。理由は色々あるんだが、とりあえずEクラスを攻めない  
理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かつたかもしれない。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみろ」えーっと……

「うん。幼馴染みが一人と美少女が一人、親友が一人にバカが一人にムツツリが一人いるね」

「どれが誰かは言わなくてもわかるだろ？」

「誰が美 s ゲフツ」『ドゴツ』

「で、それがどうしたのかしら（ニコツ）」

何か言おうとした雄一を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いつて事だ」

「？、それじゃ A クラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

一応ちゃんと考えてたのか…

「まあこれも打倒 A クラスへの必要なプロセスだからな問題ない」内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね。ま、その時が来たら解るか。

「あ、あの！」

？どうしたのかな？

「ん？どうした姫路」

「えつと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合つてたんですか？」

「ああ、それか。それはつつき明久に相談されて「それはそつとー」

「雄一は何言つたかわからんから発言させよか！！」

「さつきの話、D クラスに勝てなかつたら意味が無いよ？」

「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろ？と必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは 最強だ」

聞いた限りかつこいいんだけど、心配」としかないのはなんでだろう

う。

## 第7話 ミーティング（後書き）

閻魔さまこと映姫に関してですが外見案で

- 1 幼女
- 2 明久と同じくらいの少女
- 3 お姉さま

結果は決まり次第お伝えします

## 第8話 Dクラス戦1（前書き）

PV1万突破…突破記念短編考え方や

## 第8話 Dクラス戦1

s i d e 幽香

ついに始まつたわねDクラス戦…

私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかつて?明久から謹慎処分  
喰らつてゐるよ、仕方ないじゃない…

「…………今前線部隊と敵が衝突中」

「状況は?」

「…………今のところ互角」

Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けてい  
る…しかし彼どうやつて状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗  
聴器は破壊したはずなんだけど…

「そういう風見」

「何かしら?」

「お前、補給テストは…」

「ある程度だけど受けってるわ」

「……いつの間にだ?」

「途中退席をした次の日よ。ああ、明久と妹紅も受けてるから問題  
ないわ」

まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わな  
かつたわ…

どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだけね(プロロ  
ーグ2 参照)

しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らつてゐるし…明久から喰らつ  
てるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝つたら明久に何  
頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないようと思える  
わ…

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしいがおかしいって？H A H A H A何を言つてるのさ

「明久、お願ひだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だあつ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一宮金次郎、といつた理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤアアア（バタン、ガチャ）』

やばいすぐ逃げ出したい…

「ところでテストやつぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになつてゐる。周りにとつて僕は『勉強のできない觀察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はあ、わかつたわよ…いくぜ、明久…！」

「Fクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」

「「ここにいるDクラス全員に対して、勝負を申し込む！－試験召喚モン召喚！－！」」

僕達が手を合わせるようになると足元から、魔法陣というべきだろうか？幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としつぽがついたようなデザインだ。

「いくよ！」

「いぐぞ！」

「たかだかFクラス一人だ。一瞬でつぶすぞ！－！」

「ましてや一人は観察処分者！－！」

古文

Fクラス 吉井明久 62点

Fクラス 藤原妹紅 317点

VS

Dクラス モブ×10人 平均101点

「「「「な、何だあの点数！－？？」」「」」

「ちえ、やっぱちゃんとできなかつたから400点行かなかつたやでも高得点には変わりないよ」

「ひ、ひるむな！－数でつぶすぞ！－！」

「「「「お、おう－！－！」」「」」

「そんなに甘くないっての」

妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた

「「「ぎやああああああ！－！－！」」「」」

Dクラス4名 0点 戦死

やつぱすごいな…おつと

「妹紅危ないよつと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた

Dクラス2名  
0点 戦死

「「え・・・なんで?」」

どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくなり限りは一撃で倒せるみたいだ：

姊妹紅

「なんだ？」

「お、それ楽し

「せいかくのいきさつ」

「アーニー、お前が何をやるの?」

「妹紅」

۱۶۰

「ゲームスタートだ！！」

卷之三

あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちやつた。お

## 第8話 Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収つとちょっとですが、明久のことが  
出ましたね。

明「まだ内緒」、「はあるんだけど後に書くんでしょう？」

書けるかな・・・（遠い目）

明「ちよつとーー？」

PV1万記念短編 向日葵の記憶（前書き）

3回目で14000越えって…  
題名から誰のことかわかるかもしませんがどうぞ

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない……

それはホントにただの気まぐれだった……

「さて水をあげに行こうかしらね」  
私はいつものように向日葵畠に出た。

「あら?」

するとそこには5、6歳くらいだらうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた。  
いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし……話しかけてみようかしら……

「あら? 人間の子供がなんのよつかしら?」

「え……」

いきなり声をかけられたことに驚いたのだらうか、その子はびっくりしたように振り返った……

「……」

見ようによつてはかわいらしい顔立ちだらうか、しかしそれよりも私が見入つたのは……その瞳だつた。  
濃いめの茶色……どこにでもいそうな色だつたが、深かつた……まるで吸い込まれるような……すべてを見透かされるような……そんな瞳をしていた……

私はそれに見惚れ、そして恐怖した……

こんな子供が……ここまで深い思いを瞳につらせるものなのだらうか……

「お姉さん誰？」

「いけない…思考にふけるとこだつたわ…」

「名前を聞く場合、自分から言つのが礼儀つてものよ?」

「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」

「明久ね…私は風見幽香よ」

「へ~」

どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…

「明久、気をつけたほうがいいわよ?」

「何を?」

とりあえず…

「ここにはね…とつても怖い妖怪が現れるのよ」

「じゃあ、ここを出なきやかな…」

「そうね…だから早く…」「こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね」え?」

この子なんて…

「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどす」「くでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」

聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…

でも…

「じゃあ、またねお」「まちなさい」?」

「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る?」

「え…でも」

「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし(まあ、自分のことなんだけどね)」

「うーん、じゃあ行こうかな」

笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まあ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…

それからも明久はちょくちょくとここ遊びに来るようになつた…そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになつていた…

でも、ある意味予想できて、起つてほしくなかつたことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会つて数ヶ月たつた時、八雲紫の一言が始まりだ  
つた……

•  
•  
•  
L

「なんでもそんなのを…」

あ、  
逃げた

昌頃

早く行かないといつて今日は明久が向日葵畑で待ってるんだつた  
その時、私は気づいてしまつた…向日葵畑に感じたことがない妖力  
を感じることに…

（あやか!!朝紫が言っていた妖怪!!?急かな毛キ!!）

「中ノ小」ノ「中ノ大」

「な、やめろーー！花が傷つくなーい！」

「ハナ? ハレ? ジヤマケサイナ...」

た

# あの妖怪コロス

あのこみを消すためは筆を構えよ」とした

「… もの」

ゾワツ

「 「 …? 」 「

な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何…?

「この花達は幽香が毎日頑張つて育てたものなんだ。それに気安く触れるな…！」

「 ……」

明久の茶色だつた瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた。周りを包むような殺氣。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…

ああ、そうか…

「フ、フザケルナアアアア…！」

妖怪は明久に恐怖したことが許せなかつたのか、明久に飛びかかつた…

『ガツンッ』

「なつ…？」

しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によつて止められていた…

「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノ…」

「ええ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」

私は…相手に向けて傘をつきつける…

「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」

「覚悟はできるわよね?」

「ヤ、ヤメ…」

「…消えなさい…」

「マスタースパーク…」

「あれ?」

「あら？ 起きたの？ 明久」

「えつと・・・なぜ僕は膝枕されてるの？」といましうか？」

時折この子の思考がわからないわね…

「貴方、私が来なかつたらどうする氣だつたのかしら？」

「あ、そうか僕妖怪に襲われて…」

「ねえ、明久…」

「なに？」

「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思つの」

「うん…」

「だから…逃げる手段として私が特訓してあげるわ…」

「えつ・・・・・」

ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・

「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと  
来なさいね？」

「・・・・はい。」

ほんと明日から楽しみだわ。

思えば、この時…いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見  
ていたのかも知れない…

「…夢…みたいね」

はあ、まさか明久と会つたこの夢を見るなんて…／＼＼＼＼  
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあつたのよね…  
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな…

「おじや まします。明久、起きなさい」

まだ寝てるみたいね…

私は明久の部屋の行いつとしたとき、リビングにある花に気づいた…

「…ふふ」

それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、ちゃんと育てているらしい。

蝴蝶蘭：清純、純粹という花言葉を持つ花。

でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう…この花をあげた本当の意味に…もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛しています

PV1万記念短編 向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…

時期的には第1話の直前です。

ちなみに向日葵の花ことばには「私の日はあなただけを見つめる」というものもあるのですが

第9話 ロクラス戦2（前書き）

とつとつ彼女が……うまく書けるかな……

## 第9話 Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「やうじやのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじや…！」

「「「イエッサー！」」「」」

美波と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしゃ美波お姉さま・五十嵐先先生、こっちに来てください！」

戦場に響き渡る声に、美波は顔色を青くする。

「くつ！ぬかつたわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということを…！」

「美春…だから言つてるでしょ…ウチは普通に男が好きなんだつて…！」

「いえ、お姉さまも美春のこと愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかつたから美春を捨てたのでしょうか。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あんた」

「…なんじやろうか…帰つてもよいか？」

「き、木下！！手伝いなさい！！」

「はあ・・・しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本  
氣で帰つてはだめか？」

「き、木下～！？」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚サモン」

「あ～もひ、試験召喚獣召喚」

科学

Fクラス 島田美波 52点

VS

Dクラス 清水美春 78点

このままではやられてしまつ。そしたら補習室に・・・・・

「い、いや！ 補習室は嫌つ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻  
撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を引いた。

戦死した、と思った美波であったが

「え？」

島田美波 6点

点数が僅かに残つた。どうしたのか困惑していると

「フツフツフ・・・・・・」

『ガシツ』

突然美春が美波の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行こうとした。

「ちょっとー、どこに連れて行こうとしているのー。」

「どこに? 愚問ですわ、お姉様・・・・・・」

ゆつくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません! さあお姉様! 美春と共に大人の階段を上りましょう!」

目を爛々と輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよー、前から言つていいるけど、ウチは普通に“男”が好きなの!」

「大丈夫です、お姉様! 初体験は怖いかもしけませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ!」

「い、いや!」

「無駄ですか、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません!」

美春の言つとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。八方手詰まりだつた。それでも誰か助けてくれると信じて美波は助けを求めた。

一  
た  
助  
け

「さあ、美春と一緒に」… 「「邪魔だ！…！どけ～」」え？」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでの「」とく燃やされ美春の召喚獣は…

清水美春  
0点  
戦死

「な、何が起つたのです?」

「ははは、燃えろーー！」

卷之三

... 雜記 ...

明久と妹紅の召喚獣によつてどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるDクラスの面々だつた…

süd e明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな…

「よし、明久！！討伐数を確認するぞ！！」

もこた・妹紅・討伐数つて

「えっと僕は17人かな…」

「…やつたあああ！！勝った、18人！！！」

「うん、おめでとう」

「明久、約束だからな！！」

「ふふ、わかつてゐよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや・・・

「明久、たすかつたぞい」

「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかつたなんて言えない…

「よ、吉井…」

「し、島田さん？」

「とりあえず助かつたわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

## 第9話 Dクラス戦2（後書き）

なんていうか…突破短編で燃え尽きた…  
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出で  
ます

## 第10話 ロクラス戦ラスト あとがき（前編）

私的のことですが・・・

空の境界は神作品だと感づいて・・・

## 第10話 Dクラス戦ラスト あとがき

Dクラス付近

さすがに点もやばくなつてきたな…

「明久、どうする?」

「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」

「おい、やばいぞ！－！Dクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」

船越先生といえば数学・・・くつ、点数的にもうみんなやばくなつてゐるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ！－！」

「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ…！

s i d e 雄一

風見が手洗いに行つている間に暇だなーと思つていて須川が教室に入ってきた。

「坂本」

「？須川どうした？逃げてきたのか？」

「いや、吉井から船越先生のDクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい？」

「そりや、放送で…」

「そつと言えんば… ククク、ちょうど風見もいないことだし、須川、・・・・・・・・・・と放送で流せ（ニヤ）

「・・・了解だ（ニヤリ）」

ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄一が死亡フラグを立てている

s.i.d e 明久

『ピンポンパンボーン』

『連絡致します』

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

『船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい』

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ…

『吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「・・・え・・・・？」

数学担任の45歳独身

船越先生

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に  
単位を盾に交際を迫る様になつたと噂の人・・・

「な、なんてこつた・・・」Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言つてるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！

『繰り返し・『ジーベンジ』なつ！－え、ちよ、やめ・・・・』

『・・・コホン、さつきの放送に訂正を入れるわ。館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ』

((((須川お前のこと)は忘れない・・・)))

『あと・・・坂本雄一・・・クビヲアラツテマツテオキナサイ！！』

あ、雄一終わつたな……

「明久、私も行つていいかしら？（ニコツ」

妹紅

今は戦争に集中しよ!」

「吉井!」

「横田君? どうしたの?」

「(な、名前が出た) Dクラスの代表の隊が、隙を見てFクラスに向かっているらしいぞ!」

な、さっきに放送で見逃してしまったか!?

「みんな!! 急いでFクラスに戻るよ!!」

「「「「了解!!」」」

Fクラスに戻ると・・・

「・・・・・・・・・・・・」

「チョット、マツテテモラエルカシワ?」

「「「「は、はい」」」

す"」に笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄一と、

幽香の殺氣おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え～っと」

「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろ?」

あ、代表として何とか立て直したね。

「確かに僕たちじゃ無理だね」

「なら「だから、「ん?」

「「姫路さん、あとはよひじへ」」

僕と妹紅がそつそつと

「あ、あの・・・」

平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無をそつに姫路さんが肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通りなかつたと思つけど…」

「い、いえ、そういう訳なくして…」

「？」

「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願ひします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」

「はあ……、どうも」

「あの、えつと……や、試験召喚獣召喚です」サモン

「え？あ、あれ？」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

現代文

Fクラス 姫路瑞希 345点

VS

Dクラス 平賀源一 128点

「う、ごめんなさい・・・」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であつさつと、斬つてしまつた。

こうして、Fクラスの勝利は決定した。

## 第10話 ロクラス戦ラスト もとせよひこへ（後書き）

ふつ、なんとかここまで書けた・・・

あとは戦後対談だ

戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

## 第1-1話 Dクラス戦 戰後対談（前書き）

今のところの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでどうぞ。

# 第11話 Dクラス戦 戦後対談

戦後対談したいんだけど……

「ボロボロの雄二」

「アアアアアアアア……」（田が狂気に染まっている幽香）

卷之二

「あ、あ、平賀君ちよこと待ててね」

たゞ、まぢば・・・

「妹紅、幽香を止めるから雄一を起<sup>さ</sup>して」

「……………」

「  
・  
・  
・  
わ  
か  
つ  
た  
」

卷之二

少年少女作業中

Dクラス

えるように抑えられている)

「（いいな……）」（その状況を「うらやましそうに見ている）

「（はあ、明久に奴は……）」（FFF団を押さえながらもちよつと

「うらやましそうに見ている）

「ちよつ、ふ、藤原さん。あ、足ほどいて……」（明久に尋問しようとしたとこを妹紅に四の字固めされてる）

「「「「・・・（呪呪呪呪呪）」「」「」「（明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない）

「・・・」

うん、カオスだな～（お前が言つか！？b Y作者）

「え、えっと……」

「あれは無視しろ……」（氣絶していたところを、妹紅に思いつきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活）

「あ、ああ」

「じゃあ、対談と行こうか……」

でもよく雄一、幽香の攻撃に生き残れたな…やつぱり前より幽香、手加減うまくなつたのかな？

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて……信じられん。」

氣を取り直したように平賀君がつぶやいた。

「あ、その、やつはすいません……」

別の方から瑞希が駆け寄つていつて源一に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

「これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラス負けた、ということでクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄一はそう言い放った。

「何？」

「Dクラスの設備を奪つつもりは無いからだ。」

雄一の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

「そう言つて雄一が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。」

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろ？が悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そりゃね。つまへやれば厳重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もつ。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰つていいわ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願つていてるよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思つてるんだろ?」

「はは、そうだ。EクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社

交辞令だ。」

そう言つと源一は去つて行つた。

「さて、みんなー今日は苦労だつたー明日は今日消費した点数の補充を行つから今日は帰つてゆつくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻つていいく。

「さ、帰ろうぜ明久」

「あ、うん。帰ろうか」

「そー／＼そー／＼そー／＼」

僕たちは帰路につくのだった・・・

慧音＆妹紅宅（正確には部屋かな？）

「ただいま

「あ、慧音おかえり」

「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」

「ああ、今ご飯作ってる」

「そりが、じやあ着替えてくるかな」

「おう。私は手伝いしていくよ」

## リビング

「　　「　　「　　いただきます　　」　　」

「　　今日は明久悲惨だつたな　　・　　・　　・　　」

慧音の一言で今日の放送を思い出しちゃつた　　・　　・　　・　　

「　　慧音　　・　　・　　それは言わないで。ホントにヤバいって思つたから　　・　　・　　・　　」

「　　ああ　　・　　・　　もひちよつと力こめとければよかつた　　・　　・　　・　　」

「　　いや　　・　　・　　ダメでしょ　　・　　・　　・　　」

「　　さすがに限度つてもんがあると思つせ？　あの「ココ」のはふきでて  
るにしても度が過ぎる」

「　（ふむ、原因は坂本か　　・　　・　　）まあ、船越先生には隣の草部さん  
(49歳独身)を紹介しといたから大丈夫だろつ　　・　　・　　・　　」

「　　・　　・　　・　　」

「　　ん？　　どうした？　明久」

「　　あ、ありがとうけいね～～！　～～！」

『抱きツ』

「なつ、あ、明久／＼＼＼＼＼

「（いいな・・・）」

「つう・・・」

「・・・・・・・・・・・」（なでなで）

キングクリムゾン！—

「・・・・じめん取り乱しちゃつて・・・」

や、やっぱ。こ安心から慧音に抱きついてしまった・・・

「まあ、氣にするな／＼＼＼＼

「そうそう。あれは仕方ないよ

「つる・・・」

「明日は・・・・・・補充試験をもつて終わりかな？」

「飯も食べて一入でゲームしていくと、妹紅がそんなこといつぶやいた

「うん、たしかそれだけじゃなかつたかな？」

「だつたよね」

「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えていくが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしていろ」

「やつた」

「うん、楽しみに待つてゐよ」

さて時間はつと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ら'つな・・・」

「え、泊つて構わないわよ」

やつぱ家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」

「ん? 私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・  
でもま・・・

「じゃあ泊つてこいつかな?」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝  
た・・・

ホント、なにか忘れてこるよ! な・・・

第11話 Dクラス戦 戰後対談（後書き）

おまけ  
朝

「・・・」（チラツ）  
「・・・（スウ・・・」（右 慧音  
「・・・う・ん・・（スウ・・・」（左 妹紅  
「・・・どうしてこうなった・・・」

第1-2話 恐怖！大量殺戮科学兵器（前書き）

つ、ついにあれが…

## 第1-2話 恐怖！大量殺戮科学兵器

慧音&妹紅宅 朝

何とか一人の拘束から抜け出した僕は、

「昨日は出来なかつたからね…」

ベランダで座禅をしていた。

本当は身体を動かしたいけど… さすがに無理だからね、イメージトレーニングだけでも…

数時間後

「明久、『ご飯食べよ』

「あれ、もうそんな時間？」

妹紅の声によつて空想世界から現実に引き戻される。

「慧音は？」

「明久の邪魔しちゃ悪いからつて声かけずに行つたよ

「そう…まあ、『ご飯食べようか』

「うん」

その後、幽香を呼んで僕達は学校に向かつた。

キングクリムゾン！！

お皿

なんか作者の陰謀を感じた…

「明久、行くぞ」

いけない、話を全く聞いてなかつた…

「行くつて、何処に？」

「吉井…あんた今日姫路さんから試食頼まれてるの忘れたの？」

「「「あ、ああ」「」」

「つて、お前らもかよ」

「でもどじょうつか、明久」

「そうよね…」

「ん？お前らどじうかしたのか？」

『ガラツ』

「あ、藤原さん達、ちゅうどよかつた」

タイミングよく慧音がやつて來た。

「はい、藤原さん、風見さん」

「「ありがと」」

「なんだ、お前ら上白沢先生から作つてもうつたのか？」

「一緒に住んでるしね」

妹紅達に弁当を渡した後慧音は僕に近づいてきて、

「はい、吉井君の分です」

「ありがとうございます。上白沢先生」

「「「「なつ、何だと……？」」」

みんな何驚いてるんだろう？？

「吉井…」

「…何かな？島田さん」

「どういうことかしら？」

「い、いや足を掴みながら聞く事じゃ…」

「大丈夫よ、いへ「大丈夫じゃないからはなせ…」わ、わかったからはなし…」

た、助かつ…

「「「「手作り弁当…」」」」

「……妬ましい」

「「「「異端者には死を…」」」」

「ハイハイ、ジャマ」」

「「「「やめやああああああああ…」」」」

このクラスは本当に大丈夫なんだろうか…

「…あ、てがすべつた」

『バツ』（雄一が弁当を叩き落とすつとする）

『パシッ』（慧音がその手をキヤッチ）

「えつ」

『ドガツ！』（一本背負い）

「げふ…」

「いけませんよ？坂本君」

「アハハハ…」

時間は消し飛ぶ…

屋上

「では歸れど、どうぞ」

試食するつて言つた以上食べないとね。

「……………いただき（スツ」

「あ、ムツツリーー意地汚いぞい」

『パクツ、ドサツ！』

……えつ……

「どうかしましたか？」

「（スクツ）…『グツ』」

「あ、やつですか」

…

(あれどいの悪ひへ)

(わざと…じやなこな…)

(ここりゅう…)

やつぱつ氣のせこじやなこか

((((この井沼…薬品臭が…)))

「あ、あ、明久早く喰えよ」  
「な…」

雄一の野郎わかつて…

(逝つてここ)

「あ、吉井君…」  
「え、えつと…」  
「…」

姫路さんの皿からハイライトが…へ…

た、助けてーえーりん…!

『ガチャ』

「なんか吉井君のH e l l o がきたから登場

頭に浮かんだ言葉を心の中で叫んだら永琳が来た。

「や、八意先生…どうしたんですか？」

さすがに永琳の登場に雄一達も驚いているようだ

「…」

状況確認中

「姫路さんだつたわよね？弁当に何入れたの？」  
「え、えっと酸味が足りなかつたので…」

「硫酸を…」

「…な？」

「…試食は？」

「食べたら太るのでしてませんよ（＝＼＼＼＼＼）」

『ブチツ』

「ちゅうと姫路さん、いつかこいつじゃー…」「え？先生？」

『ズルズル

「 「 「 …… 」 」

『 もちああああ…』

「 … とりあえず 」 飯食べよつか

「 うん 」

「 そうね… 」

うん、姫路さんに料理させたら危険だ…

第1・2話 恐怖！大量殺戮科学兵器（後書き）

まさかの永琳登場。

まだまだ続く。

第1-3話　日常？（前書き）

幽香の召喚獣の腕輪の能力ぢうじょう・・・  
妹紅のは考えたんだけど…

## 第1-3話 日常？

まさかの永琳の登場により命の危機を脱した僕であるが・・・

「さて・・・吉井、八意先生とはどうこいつ関係かしら?」

「あと、上白沢先生もです」

島田さんと姫路さんに（悪こほりで）迫られ、

「「「「あんな美人の先生達と知り合いとは・・・」「」「「  
「「「「うらやま・・・恥と知れ!...!...」「」「「  
「多数決を取る、」」」で死刑とする・・・」  
「「「「賛成!...!...!」「」「「

FFFF団に囲まれ、僕は十字架に縛られている・・・

幽香と妹紅は慧音からの頼まれごとでこないし、やばいな・・・

くわ、あせいで一ヤつこじる雄一がむかつく

「「「「いやんと嬲しなきやよね（ですかね）」「」

いや僕は悪い」としてないし、一人のペシトでもないし

「「「「異端児には死を!...!...」「」「」

君たちは黙つてろ

「明久」

「何さ・・・雄」

「今だから言つておく」

?

「俺はお前の幸せがとつても大つきらいだ！！」

「あんた最低だな！！！」

どづする・・・

「では火W「貴方達・・・何をしているのかしり?」へ・・・?」

「「「「あ・・・」」」

「私言つたよな・・・明久に手を出したら容赦しないって・・・」

Fクラスの入り口には不死鳥の雛と・・・USCが立っていた・・・

数分後

「明久、大丈夫か？」

「あ、うん縛られただけだからね」

目の前にはFクラスだった物の山・・・あ、雄一原形すらとじめてない。

「ロープ解くぞ」

「うん、わかった」

はあ、やっと解放される・・・!?

「も、妹紅ちよつとま・・・」

幽香が姫路さんと島田さんを睨んで前に・・・ダメだ、気づいていない！－

「え？」

『シユルツ』

現実とは無情にもひもは解け・・・

僕は・・・

「幽香危な・・・」

「え？」

『ドサツ。ポフツ』

幽香を押し倒すように倒れた・・・

はて、何か柔らかいものが・・・

「・・・・・・・」  
「・・・・・・・えつと・・・・・」

・・・うん・・・現実を認めよう・・・

これは・・・幽香の胸だ

「／＼／＼／＼！？？／＼／＼／＼／＼

『ドンッ』（幽香が明久を弾き飛ばし）

『ペーンー』（蹴りを放つ音）

僕が悪いのはわかってるけど、平手じゃなくて蹴りってどうなのよ。  
・  
・  
・

『ゴシグシャツー』

あ・・・じ・・・

・・・なんか後頭部に柔らかいものが・・・

あ、僕死んでなかつたんだね・・・

「こ」は・・・

「あ、明久おきたのね」

「幽香？」

「その・・・わつわは」「めんなさい。いきなり蹴り飛ばして・・・  
「気にしないで。僕が悪いんだし、それより・・・」

なんていうかちゅうど胸（ゲフン、ゲフン）　幽香を見上げるよう  
な感じになつてゐるけどもしかしてこれ・・・

幽香を見上げている + 後頭部に柔らかい感触 = 膝枕OK?

・・・

「あ、動いちゃだめよ、永琳いわく一応安静にしなさいらしいから  
でも・・・」

あれが・・・

「大丈夫、妹紅が牽制してるわ」

向こうを見ると、僕に飛びかかるうとしているFFF団と姫路さん  
と島田さんを妹紅が足止めしていた  
あ、雄一（二ラ）カタマリが動いた

「じゃあもうちょっと休むよ  
「ええ、おやすみなさい」

・・・

時間はけし飛ぶ!!

学校終了後

三人で帰宅中

「あ、いけね・・・筆箱教室に忘れてきちゃった」

「まつといつか？」

「いや、先に帰つてて大丈夫だよ」

「わかつたわ、とりあえず急いでね」

さてと、学校に戻らなきや・・・

少年移動中

Fクラス

『ガラツ』

「筆箱はつと」

「よ、吉井君ーー?」

「あれ?姫路さん?」

「ううしたんだね?・・・

「ジビビビビビビーしたんですか?」

「いや、筆箱を忘れたから取りに・・・・何でそんなに慌ててんの?」

「べべべべ別に慌ててなんかいましゃんによおー?」

い、いや噛みすぎだから・・・

ふと姫路さんが座つてる席(ちやぶ)を見ると、卓袱台の上に何やら可愛らしい便箋と封筒が。

「あ、あのつ、これはつ、その ふあつ！？」

あ、こけた。

?「これは手紙？」

『貴方のことが好きです』

えーっと……、これは俗に書つラブレターという奴……だよね？ 実在したんだ……。

「えつと……」

「／＼／＼／＼／＼

まあ誰かに送るつてことだよね、秀吉かな？まさか・・・雄一ー？

見たものは仕方ない、素直に聞こつ

「その人のどこがいいの？ やっぱり外見？」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、勿論外見も好きですけど！」  
「へえー、そりや羨ましい限りだね。外見に自信の無い僕にとつて

は

「えつ？ ビーしてですか！？ とっても格好良いですよー私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ ホントに？ 随分酔狂な友達なんだね」

自分で言つのもなんだけど

「良く分からないんですけど、吉井君が坂本君と一緒にいる姿を見

ては『逞しい坂本君と美少年の吉井君が一緒に歩こう』て絵になるよね』つてよく言つていました

「び、びしょ？はは…、何か照れるな。お世辞でもうれしいよ」

「『やつぱり吉井君が『受け』なのかな？』とも

「前言撤回。その友達とは距離を置こう。姫路さんにはまだ早い」

婦女子なのか！？

「それに…」

「……まだ何か？」

「『吉井君つて女装が似合つたよ』とも

「姫路さん、その友達とは今すぐ縁を切らつ。間違いなく君を駄目ににする」

「私も最近、何となくやつ思えてきました」

「しつかりするんだ姫路さん！君はそっち側に行っちゃいけない！」

やめてくれ！！仕事だから我慢して女装したことはあつたけど、精神的にあれはきついんだ！！

いかん……話を変えねば

「や、それにしても姫路さん、外見『も』つて事は、中身が良いの

？」

「あ、えーっと…………はい」

なんとかそらせた…

「その人のどんな所が良いの？」

「や…、優しい所とか…」

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……、私の憧れなんです

「その人のどんな所が良いの？」

「や…、優しい所とか…」

「優しくて、明るくて、いつも樂しそうで……、私の憧れなんです

強い思いを瞳に感じる・・・ほんとに好きなんだな・・・

さてと筆箱ももう回収しておし、あとは帰るだけなんだけど・・・

「姫路さん」

「は、はい」

「その手紙、良い返事が貰えると良いね」

「…………はい！」

命短し、恋せよ乙女ってね。

### おまけ　血元にての会話

「そう言えば明久」

「?何、幽香」

「蹴つたとこ大丈夫かしら?」

「うんあの程度なら大丈夫だよ」

「そう・・・」

あ、そういえば・・・

「そういえば・・・」

「?どうしたの?」

「いや・・・なんかおぼろげなんだけど・・・蹴られると血元が見えた気が・・・」

「・・・忘れなさい」

「え?」

「わ、わかつたけどなんで……」

なんか今日は怒られてばつかだな・・・・

## 第1-3話　口算？（後書き）

ちょっとと「アーヴィングレター」の口をすりました、理由？何となくです。わ、忘れてたわけじゃないんですよ！？

## 第14話 Bクラス戦1（前書き）

やっぱ平日は忙しいから書く時間が少ないな・・・  
まあ休日も忙しい時もあるけど。

前話の色ですが、友人の完璧な趣味です  
オリジナル技ですが、技名とどんな感じの技か、については友人と  
頑張つて考えました。

## 第14話 Bクラス戦1

Fクラス

「せん輩、総合科目テストが苦労だった」

畠田、昨日から跨いでやつていたテストがようやく全科目終了。

大体平均65位かな？

「午後からBクラスとの試合戦争に突入する訳だが、殺る気は充分か？」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

殺る気つて・・・あ、ちなみにBクラスの宣戦布告は須川君が（幽香に脅されて）行きました。

予想どうり雄一は僕を行かせようとしたみたいだけどね

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負ける訳にはいかない」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取つて貰う。野郎共、キツチリ死んでこい！」

「が、頑張ります」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮。

その姫路さんは、そんな皆のノリに追っていけないらしく若干引き

氣味だ。まあ、それが普通だよね。

「先陣は・・・」

「僕と幽香と妹紅とで行くよ」

「じゃあそれで頼む」

「了解」

「前回は出来なかつたけど楽しみね」

幽香・・・なんていうかごめんね・・・

『キーンコーンカーンコーン』

「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『『『サー、イエッサー！……』』』』

昼休み終了のベルと同時に、ダッシュで教室を飛び出してBクラスへ向かつて全力疾走。敵を教室に押し込む事が目的なので、とにかく勢いが重要となる

「あ……待つて…、下さ～～い…」

だからいきなり指揮官が出遅れてるけどもいちいち構つていられない。

さつき雄一も言つてたけど、渡り廊下の戦闘は絶対に落とせないから、戦力も五十人中四十人を注ぎ込んで勝ちに行く。その代わり教室がほぼスッカラカンになっちゃうけど。

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、担当教師の長谷川先生は広範囲の召喚フィールドを展開出来るという理由だ。他にも、英語Wの山田先生と物理の木村先生もいる。

「一ノ瀬、三浦アダム！」

「高橋先生を連れているぞ！」

数は大体十人程度。あくまで様子見つて所かな?

卷之二

「おあ!!!!!!」

Bクラス戦が開始された。

Fクラス	Bクラス	総合
Fクラス	Bクラス	総合
モブB	モブA	モブA
V S	V S	V S
68点	137点	1947点
数学		
Bクラス		
モブB		

Bクラス モブC 140点

V  
S

V  
S

FケラスモフC 71点

圧倒的だ・・・「「「「「ていうか、あつかいひどくないか！－

卷之三

なんか叫んでるけど無視して早くフォローしなきゃやばい！

「幽香！！！未江！！！・・・・」  
「アガル！」

ええ、わかつたわ

「カモン...」

前回僕と妹紅の召喚獣は説明下から省くとして、幽香の召喚獣は・・  
・うん私服（原作以下略）に傘を持つてる。あとなんていうか、ト  
ラ耳と尻尾つて・・・

気にしないでおけ。相手は、つと

英語 W

Fクラス 風見幽香 345点

V  
S

Bクラスモード 121点

モード D

数学

Fクラス 藤原妹紅 198点

VS

Bクラス モブB 119点

妹紅は得意科目じゃないけど点数が勝ってるから問題はないかな・  
・えっと僕は、っと

#### 物理

Fクラス 吉井明久 71点

VS

Bクラス モブN 188点

ローマ字が飛んだだと・・・

まあ冗談はほどほどにして、

「　「　「おい待て！？なんだよあの点数！？！？」」「

「なんかホント驚いてばっかだな」

「まあ、いいじゃない」

「お～い一人とも僕の心配はしないんだね・・・」

「「当たり前でしょ（だろ）」「

ですよね～まあ・・・

「勝てないこともないけどね」  
「な、雑魚のくせに！？」

あれは・・・ハルバートかな？それで相手が斬りかかってくるけど

「ほいっと

『ガツ、ドカツ』

「な・・・・」

先端付近を地面に抑え込めばなれない操作じゃ動かせないからね。

「ほら、隙だらけだよ」

『ズバツ！――』

モブN 109点

やつぱ一撃じや無理か・・・なら召喚獣でもできるか練習として

「・・・散れ」

—閃鞘・散華時雨—

まるで雨の「」とく高速で刺突を行つ・・・この技の利点は密度を調整して、小範囲か広範囲かわけれぬ「」である

モブN 0点 戦死

「な・・・負けた？」

「嘘だろー!? あんな明らかに雑魚っぽい吉井の召喚獣にやられたなんて! ?」

「気を引き締めろ! 奴らをただの雑魚だと侮るな! ロクラスに勝つたのはマグレじゃないかもしね!」

うん・・・あんまり上手く出来なかつたな・・・要練習だ

「お、やつぱり勝つてるな」

「うん、妹紅も勝つたみたいだね」

「当り前だ」

「明久・・・たつきの技・・・」

「ん? ああ、やれるかやつてみたんだけじ要練習だね」

「あれでか・・・」

だつて違和感があるんだもん

「す、すいません・・・遅くなりました・・・」

あ、やつと追い付いたみたいだね。って

「姫路さん、大丈夫?」

「何なら少し休んどく?」

「だ、大丈、夫、です。行つて、来ます」

まあ、見た感じ大丈夫かな?

「き、來たぞ! 姫路瑞希だ!」

Bクラスの誰かの叫びに、他のメンバーの目付きが変わった。明らかに姫路さんを警戒しているね

「長谷川先生、Bクラス若下律子です(な、名前出してもらえた・・・)。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!」「律子、私も手伝つ!」

「 「 「 試験召喚…」 「 」 」

Bクラスも必死みたいだね・・・でも・・・

### 数学

Fクラス	姫路瑞希	412点
VS		
Bクラス	岩下律子	187点

Bクラス	菊入真由美	152点
------	-------	------

うわ・・・姫路さん400オーバーだ。つてことは・・・

「あ、腕輪だ」

「あ、はい。数学は結構解けたので…」

一科目400点以上点数を取ると、特殊能力を持つた腕輪が使える様になる。その腕輪が姫路さんの召喚獣の左手首に装備されている

「そ、それって!?

「私達で勝てる訳無いじゃない!」

向こうの一人が姫路さんの腕輪を見て顔色を変える。

別に腕輪を持つてるからと黙つて絶対に勝てないと思  
うんだけどな・・・

戦い方次第じゃ圧倒的実力差も覆す事だつて難しくない。『戦闘』  
において一番大事なのは『戦術』じゃなくて『戦略』、要するにど  
う戦うかだし

「じゃ、行きますね」

姫路さんが手を握り込むと、その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が標の方へ左腕を向けてる。

「これって……

「ちよつ、ちよつと待つてよー?」

「律子ーとにかく避けないとー！」

大袈裟な位に慌てて横つ飛びする一體の敵召喚獣。しかし

『キュボツ』

「「やあああああ」」

岩下律子	0点	戦死
菊入真由美	0点	戦死

うわ・・・レーザーって・・・しかも2体とも黒墨だし、しかも一撃だよ・・・

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「なつ、そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスに動搖が走る。

でもあれは仕方ない・・・てか姫路さんの召喚獣の能力怖すぎ・・・避けきれるかな？

「み、皆さん、頑張って下さいー」

「や、姫路さん？その指示は指揮官としてはどうかと……」

「つねつしゃああーつ！」

「やつたるでえーつー。」

「姫路さん愛してゐひひひひひ」

馬鹿ばつかだ

「さて、僕達も行こうか」

「そうね」

「あ、姫路さんは休んでていいよ。疲れてるだらうし、腕輪で結構点消費してるでしょ？」

「あ、はい」

戦場の流れもこっちに傾いたし大丈夫だらう

「あれ？妹紅は？」

「妹紅なら教室に戻ったわよ

え？

「なんで？」

「・・・Bクラスの代表根本らしいわよ」

「・・・ああ、あいつか・・・」

根本恭一、一言で言えば『卑怯者』。

噂では『カンニングの常連』だと、『球技大会で相手に一服盛つた』とか、『喧嘩に刃物は当然装備デフォルト』そして幽香たちにもかなり迷惑をかけた男子だ。

「なるほど。たしかにあいつなら何かしそうだね」

「私達も一応戻つてみる?」

「うん」

ホント、なにもなればいいんだけど・・・

## 第14話 Bクラス戦1（後書き）

今すぐ悩んでいる・・・  
根本のどめ誰で刺そつ・・・

番外 キャラ紹介 東方編（前書き）

今のところ出たキャラについて書きます。書き足し予定あります。  
友人と一緒に考えながら書いてたら力オスに（笑）  
こちらは現代入りした東方キャラを書こうかと

## 番外 キャラ紹介 東方編

藤原 妹紅

読み ふじわら もこう

能力：死なない程度の能力

スタイル：身長は160位 男子制服でわかりにくい、貧乏「じくらい」あるわ！！／＼／＼／＼（作者はログアウトしました

外見：白い長髪に赤い目、基本シャツにもつべを穿いている。

学生服はスカートが慣れないとのことで男子の制服（生徒手帳には一応女子の制服で写っている）

召喚獣の能力：『リザレクション』

100点消費することで戦死した時、元の点数から200点引いた状態で復活できる。（ただし腕輪は召喚してすぐにしか発動できない

点数：古典、歴史に関しては400点を超えることも。

しかし地理は苦手で50台常連。ほかの教科は100～200台である

口調：基本男口調だが時折女口調になる

設定：幻想郷で明久が初めて会った住人。どうも明久を放置できなくて関わっていくうちに「明久がいる＝妹紅もいる」と言われるほど身近な人間になった。

料理の腕前は普通で、ちょくちょく明久の家に泊まりにいっている。自分が不老不死であることを明久にばれた時、明久とある約束をしている。

明久のことは大切な友人であり大好きな人であり、とりあえず彼を傷つけるものに対する容赦がない。

恥ずかしい思い出は、お風呂に明久が入つてることに気づかず入ってしまったこと（その後二人で入つてたそうだ

風見 幽香

読み　かざみ　ゆつか

能力：花を操る程度の能力

スタイル：身長は165位　トップ89のD「・・・ちょっと話があるんだけどいいかしら・・・」

外見：緑色の髪を肩にかかるない程度に伸ばし、紅い目。よく傘を持ち歩いている

召喚獣の能力：投影

50点の消費でもう一体召喚獣を作ることができ。しかしその召喚獣は1つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える点数：全科目300点越えというオールマイティ。強いて言うなら歴史と古典がたまに400点を行く。

しかし、意外な弱点が・・・

口調：基本丁寧語時折命令系

設定：実は幻想郷で最初の明久の被害者（向日葵の記憶参照）。

花の妖怪だけあって花が大好きで傷つけるものには容赦がない。明久のことはよくからかつたりするが、攻められると弱いみたいで、時折暴力をしてしまい落ち込んでしまったりしている。

明久のことは自分のものと言つたりしているが「明久の相手は明久本人が決めること」と思つてている。

恥ずかしい思い出は、多すぎてわからないそうだ（ある意味明久のナイエエッチの一番の被害者

上白沢 慧音

読み　かみしらさわ　けいね

能力：歴史を食べる（隠す）程度の能力：人間時　歴史を創る程度

の能力：ハクタク時

スタイル：身長は167位（帽子を入れて175行かないくらい）

・・・大きいです「だまれ！／＼／＼／＼

外見：少し水色を帯びた銀髪の長髪に黒っぽい瞳（人間時）と薄い緑の長髪に赤い瞳と・・・角（ハクタク時）。尻尾もある

教科担当：歴史

口調：学校では敬語、基本は中性的な話し方

設定：幻想郷の寺子屋の教師だが監視を理由に文月学園の教師をしている。

ワーハクタクだけに運動能力は高い。

お仕置きは基本拳骨、明久達には拳骨では効きにくいので頭突き。明久のことは出会ったころは姉として面倒を見ていた。

自分が半妖であること知られることを恐れていたがバレてしまう。しかし態度を変えずいつもどうり接する彼に思いをぶつけるも明久に「そんなことは関係ない、僕は好きで慧音といるだけだよ」と言われて以来、自分が半妖であることを引け目にとらなくなつた。恥ずかしい思い出は、宴会の時酔つた勢いでハクタク化し、明久のファーストキスを奪つてしまつたこと。（本人は記憶がなく妹紅経由で聞き1週間ほど目があわせられなかつた

この頃の不安は何かしらと暴走するFクラスである。

八意 永琳

読み やごころ えいりん

能力：あらゆる薬を作る程度の能力

スタイル：身長166位 すぐく・・・大きいです「あらあら」

外見：銀髪の長髪を三つあみにしており鈍い銀色の瞳。赤と青の半々の不思議な服を着ている（学校ではその上に白衣）

教科担当：保健医 保健体育（実際は全科目担当可）

口調：学校では敬語 基本は丁寧語

設定：温和で優しい性格をしているが、怒ると怖い・・・。

幻想郷で医者をしながらも明久のために（本人は問題ないと言つがよく怪我をするため）文月学園の保健医をしている。

天才であり点数はほぼつけようがなく、制限をしている（それでも勝てる人はほぼいない）。

明久については自分達を完全に殺すことができる存在という意味で興味を持つていたが自分の過去、罪について聞いても態度を変えない人間性に女性として興味を示した（本人いわく）。

その外見、スタイルからファンクラブ等も多いが「明久君以外にはあんまり興味はないの」と断つているそうだ。

明久が「助けて！！えーりん！！」と心の中で叫ぶどこであろうとどこからともなく現れる。

恥ずかしい思い出は、酔った勢いで明久を誘惑しようとしてしまったこと。（しかしある意味これで吹っ切れたとも彼女は言う

番外 キャラ紹介 東方編（後書き）

・・・これはひどい・・・

幽香に関してですが・・・歌のネタです！！

## 第15話 Bクラス戦2 『アキ』（前書き）

友人と明久の能力やお話について話してたら……結果

影月・友人「うわ……中二病くせえ……」

気を取り直してどうぞ

## 第15話 Bクラス戦2 『アキ』

教室にたどり着くと

「お前達、覚悟はできているな」

「「「補修はいやだあああああ」」」

Bクラスの生徒だろうか・・・鉄人に連れて行かれた

「お、明久」

「妹紅、これは・・・」

そこには壊されたちゃぶ台、ペン漁られたカバンが散らばっていた。  
・・あ、僕達のところはまだ何もされてなかつたみたいだね

「『めん・・・私が来た頃にはあいつらがいて・・・それに一人逃げられちゃつた』

「大丈夫よ、被害をここまで抑えられただけよかつたと思いましょ

「うん、一応何か取られたりしていいか確認しよう?」

「「うん(そうね)」」

うん何も取られてないな。あればずっと身に着けてるしね。

僕は首にかかるひし形の結晶思い浮かべた

「どうした?何かあったのか?」

「つて雄二どこ行つてたの、危うくもの全部壊されるとこだつたじ

やないか・・・

「これは・・・」

「Bクラスだよ」

どこに行つてたのか知らないけど雄一達と秀吉が帰つてきたので簡単に状況を説明した

「被害は少ないが確實に補給テストに響くのう」

「まあそれはそうと、何でゴリラは教室から離れたりした訳?」

「その呼び方はやめる。いや、向こうから協定を結びたいという申し出があつてな。その調停の為に教室を出ていた」

「協定?」

「ああ。『四時迄に決着が着かなかつたら戦況はそのままにして、続ければ明日午前九時に持ち越し。その間は試合戦争に関わる一切の行為を禁止する』つてな」

「それ、承諾したの?」

「そうだ」

「何で? 体力勝負に持ち込んだ方がこつちとしては有利なんじゃ

」

「姫路以外は、な」

「「「あつ」」」

「奴等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろ? そうすると、作戦の本番は明日といつ事になる。その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

「なるほど、だから受けたのかしら? 姫路さんが万全の態勢で勝負出来る様に」

「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

「うーん…」

なんか引っかかるな・・・

「どうした明久？バカのくせに悩んだりなんかして」「雄一、バカは余計だよ。いや、なんかこいつ引っかかるものがあつてや……」

すると

「確かにそうね……こんなことをするようなあの小物がこんな対等な条件の協定をただで出すとは思えないわね」「とするとなんで……」

「吉井、ここにいたか！？」

いきなりの来訪者の声が教室に響いた

「どうしたの？横田君」「実は島田が人質に捕られた」「…………はあ！？」「…………」

器物破壊の次は人質！？とか島田さんなんで指揮官頼んできたのに人質になつてるのさ……

「お陰で相手は残り一人なのに攻めあぐねている。どうする？」「わかった、とりあえず状況確認に行こう」「なんにしても急がなきゃ……」

そこには島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制していく。成る程、ただ戦死させるんじやなくて、人質を取つて補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

科目は・・・歴史か・・・なら

(幽香・・・)

(・・・わかつたわ)

「ど、どつする？」れじゃ手が・・・

「総員突撃用意！」

「「「「え！！！？？？」」」

「ちょ、それでいいのかよ？あっちには島田さんがいるんだぞ！？」

「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

「確かに明久の言うとおりだな」

「ええっ！－！ちょっと！？」

あともうちゅうとかな？

「ちょ、ちょっと待てお前達！－！」

「ほらあ、あっちからもちゅうと待ったゴールが掛かってるじゃな

いか。もう少し考えてからでも遅くはない。

「マイツがどうして俺達に捕まつたと思つてこる?」

「バカだから？」

「バカだからでしょ？」

「バカだからじゃがないの？」

「殺すわよ」

「明久に何かしようものなり逆にやるわよ。」（一コラ）

「幽香押せえて！－じゃあ、なんで捕まつたの？」

まあ聞いてみるか

「コイツ、『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かつたんだよ」

גַּתְּהָן אֶלְעָזָר

「な、なによ／／／

怪我した僕に止めを

1

「違うわよ!! ヴチがあんたの様子を見に行つちや悪い三つ子の!!? これでも心配したんだからね!!」

「……島田さん、それマジ？」

「そ、それは？」

「へつ、やつと解つたか

「吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなつた』って聞いて

心配したんだから」

總貢突擊！！！

ちよ妹紅、幽香！？

「何で！？」

「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要ら

ん！居ても足手纏いだ！！

「お、おい待てって！見捨てるのか!? そんなあつさり味方を見捨てるのか!?」

「黙りなさい！…さあ、そいつにはもう人質としての価値は無いわ！大人しく往生しなさい！！」

「くつ、畜生っ！だつたら望み通り、コイツを道連れにしてやるよお！！」

「今だ！！！」

「幽香！…！」

「…・了解したわ」

いや・・・しぶしぶと言わないでね・・・

Bクラスの一人と島田さんの間に2人の幽香の召喚獣が現れる

「「え？」」

歴史

Bクラス 鈴木一郎 33点

Bクラス 吉田卓夫 19点

V S

Fクラス 風見幽香 412 - 50点 × 2

「ダブルスパーク」

2本の砲撃が一瞬にして相手の召喚獣を消し飛ばした

幽香の召喚獣の能力・・・それは『投影』

50点の消費でもう一体召喚獣を作れる。しかしその召喚獣は一つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える。

「戦死者は補習ううう……」

「ぎやああ……」

「助けてえー……」

打ち取つた瞬間、鉄先生に抱き上げられて連行されるBクラスの人。

ふと思つたんだけど、鉄先生はどうやって戦死者の存在を察知してゐんだろう?身体のどつかに『戦死者察知センサー』でも着けてるんだろーか?

それより……

「島田さん……」

「吉井!……よくも見捨てよつと……」

「……ちよつと歯を食いしばりなさい」

「え?」

『パン!――』

「!?」

いきなり幽香にひっぱたかれたことによつて島田さんは田を白黒させる

「貴方ね、敵の偽情報に踊らされたばかりか、指揮官が持ち場を離れるとはどういうことかしら?明久はあなたを信じて指揮を任せたのに、危うく部隊が全滅するところだったのよ?」

「だ、だつて吉井が……」

「そんな物理由にならないわ。貴方のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ？ 分かっているのー？」

「あ・・・・・う・・・」

「さつさつき言つた台詞、アレは芝居でも何でもないわ。自分本位な事しか考えない様な奴は、居たつて邪魔になるだけだわ・・・足手纏いなのよーーー！」

「幽香ーーー！」

「・・・・ちゅうと頭に血が上つてたわね・・・『ごめんなさい』

そう言つて幽香はみんなを連れて教室に戻つていく・・・ハア・・・

「島田さん・・・」

「・・・・・・」

「あ～、『ごめんね島田さん。幽香つて興奮し過ぎると口調が乱暴になっちゃうから…』

「・・・・・・」

「でもさ・・・、幽香の事、あんまり悪く思わないであげて。あれでも島田さんの事、かなり心配してたみたいだからさ・・・。だから

「分かつてる」

「え？」

「風見さんが言つてた事、間違つてない。ウチは取り返しのつかない事を仕出かす所だつたんだ。叩かれて当たり前よ」

「島田さん・・・」

「・・・・」

「う・・・空気が・・・よし

「だ、大丈夫だよー失敗は誰にだつてあるんだからさーまた次の機

会にこの汚名を挽回すれば良いじゃないか！」

「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だつたと思ひなさい。」

「あれ？ そーだっけ？」

「全く…、何でウチでも知つてゐる様な熟語を日本育ちのあなたが知らない訳？」

「ぐつ…」

「…・・・・ふふつ」

「ほ、ほら島田さん掴まつて！ 僕達も早く教室に戻らうよー。」

「あ、誤魔化した」

「氣のせいです」

「ふつ、なんとかなつた…・・・

「吉井…・・・・・

「ん？ 何？」

「いめん」

「良じよ、別に。島田さんが無事で良かつた

「あと…・・・・ ありがと…・・・」

「うん…・・・」

やつぱりお礼いわれるのはちよつと恥ずかしいな

「ねえ、吉井」

「な、何？」

「今度からさ『アキ』つて呼んでも良い？」

「え？」

「ダメ？」

「いや、ダメでは無いけど…」

「その代わりにさ、ウチの事も『美波様』つて呼んでも良いから」

「僕だけ様付け！？」

「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だつたと思ひなさい。」

「ふふつ、冗談よ、冗談。」

「島田さんの場合、冗談には聞こえないんだけど・・・」

「じゃなくて？」

「・・・美波」

「うむ、よろしい」

なんか嬉しそうな雰囲気だな・・・

「ほら、歸きつと待つてるよ？早く行こ、アキ」

「おわつ！？ちよつ、島・・・美波、そんな引っ張んないでー。」

ま、元気になつてくれたし、良つか。

第15話 Bクラス戦2 『アキ』（後書き）

いつもこれなり・・・  
いや言つまひ

## 第1-6話Bクラス戦3 小物の罫（前書き）

よし、ある程度じつするかは決まつた！後はそれを書けるかだ！

無理だ・・・

明「あきらめるのはや……？？」

## 第16話 Bクラス戦3 小物の罠

さて協定どおりBクラス戦は明日まで持ち越しになつたけど……

「Cクラスが試合戦争の用意を始めているだと？相手はAクラスか……いやそれはないだろから。

漁夫の利を狙つつもりか……いやらしい連中め」

ムツツリーニの情報いわくCクラスが怪しい動きをしているらしい  
Cクラス……あれ？なんか大切なことを見落としてる気が……

「で、どうするんだ？」

「協定を結ぶか。ま、Dクラスを攻め込ませるぞって脅しをかければいいだろう」

「わかったわ」

Cクラスと協定を結ぶということになり、雄一、僕、幽香、妹紅、  
ムツツリーニで行くことになった。

姫路さんと秀吉は教室で待機してもらつてている

少年少女移動中

Cクラス

「失礼するわ。すまないがCクラス代表はいるか？」

「私だけど、何かようかしり？」

僕たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

あれ？人の気配が・・・！

「Fクラス代表としてCクラス」「ちょっと待って雄一」ん？ビリ  
た

「えっと小山さん」

「何かしら？」

「あそこに誰を隠してるんですか？」

「！？な、何を言つてるのかしら？」

「どうだ・・・Cクラスといえば・・・

「言い方が悪かつたかな？根本君そんなどこに隠れて不出で  
たらどう？」「なつ！…！」

根本君と小山さんは・・・付き合つてゐるんだ

s.i.d e 雄一

な・・・何言つてんだこのバカ？根本が二二二二二二二二二二  
「つちばれたか、おい坂本を逃がすなーーやれーー！」  
なつーーマジでいただとーー？

「つち！妹紅、ムツツリーーー雄一を連れて逃げてーーーー！」  
「・・・・・・了解」

「わかった。明久氣をつけろよ」

「大丈夫だよ。幽香足止めするけど手伝ってくれる？」「

「聞かなくてもわかるでしょ？」

藤原と風見も入った時から戦闘態勢だったが・・・

「ほら、代表行くぞ。お前が戦死したら困るんだ」  
「あ、ああ・・・」

明久お前・・・なんなんだ?

s i d e 明久

さてと、雄一も逃げたことだし

「根本君、約束を破るなんてひどいじゃないか」「つむせえ！お前ら！こんな雑魚早くつぶせ！・・・」

「ゆ、幽香？」

「・・・大丈夫よ。さ、行きましょう明久

「だね」

「「サモン！！」」

数学

Fクラス 吉井明久 68点  
Fクラス 風見幽香 312点

V/S

Bクラス モブ×10 平均172点

「「「な、なんだよあの点数」「」「」」  
「こいつら驚くしか脳ないのかしさ・・・」

「あははは・・・・」

「怯むな！！数でつぶせ！！」

「……………」

あら？ 根本君がいなーい・・・・うわ・・・・逃げてるよ・・・・

「明久、少し時間作つてくれないかしら？一気に吹き飛ばすから」「了解、じゃあ行くよ！」

「解してお行くよ。」

「な、吉井が一人で突っ込んできたぞ？」

は  
おんな祭魚|ちくいんじゆせう|一人を一隻はくいんじゆ

はあ、ひどい言われようだな、ホント

「散華時雨」

【閃鞘・散華時雨】、刺突の密度を調整することで範囲を調整することができる。

「な、近づけねえ！」

「近づいても攻撃で押されるー？」

広範囲は威力が減るもの、足止めにはちょうどいい！！

「明久！！準備OKよ！！」

「わかつた」

「あ、攻撃がやんだ？」

「・・・消し飛びなさい・・・」

「」「」「」「」「」「」

## マスター・スパーク

Bクラス モブ×10 0点 戦死

「…………え？」

幽香の召喚獣は基本拳とかによる攻撃だが、力をためる」とこなつて砲撃とかを撃つことができる。  
これは召喚獣自身の能力で腕輪とかを取る必要はないようだ。

「ち、逃げるよ」

「そうね」

少年少女逃避中

Fクラス

「ただいま～」

「ただいま」

「お、大丈夫だったみたいだなお疲れさん」

妹紅が労いをくれる

「しかし、どうするのじゃ？」

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

ま、それが狙いだろうね

「まあ、向こうがその気ならここも考えがある」

「考え？」

「ああ、明日実行する。とりあえず今日はこれで解散だ」

・・・

## 保健室

「失礼します、八意先生いますか?」

「あら、明久君どうしたの?あと誰もいないしこの呼び方でいいわよ?」

「じゃあ、永琳。じつは・・・」

キングクリムゾン!-

## 次の日の朝

「考えがあるって言つてたけどどうあるの?」

幽香がそう質問すると雄一は

「ああ、コイツを秀吉に着でもらひ」

「んむ?それは別に構わんが、ワシジが女装してビースルんじや?」

いや、構おつよ、男としてみてほしいなら構おつよ秀吉!-!

「なに、秀吉には木下優子としてAクラスの使者を送つてもいい」

木下優子。秀吉君の双子のお姉さんであり、Aクラス所属。違いと  
いたらテストの点数と喋り方位しか見当たらない程秀吉君にそつ  
くり。しゃべり方なら秀吉はすぐにまねれるからほほ見分けようが  
ない。

成る程ね、そのお姉さんに化けてAクラスとして圧力を掛けようつ  
て事か。

「という訳で秀吉、早速用意してくれ」

「う、うむ…」

坂本君から制服を受け取つて、その場で生着替えを始める秀吉

「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」

おい、君達秀吉は男だ、あとムツツリーーー写真を取らない。  
姫路さんに美波、まるで女の子を見るよつにショックを受けない  
つて、眼つぶしは危ないって…！」

「よし、着替え終わつたぞい」

「じゃあCクラスに行くぞ」

「一応付いて行くよ」

またあんなことがあつたら困るしね

少年少女移動中

Cクラス前

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」  
「気が進まんのう…」

「そこを何とか頼む」

「もう……。仕方無いのう……」

「悪いな。とにかくあいつ達を挑発してAクラスに敵意を抱く様仕向けてくれ。お前なら出来るハズだ」

「はあ……。あまり期待はせんでおくれよ……」

そう言つて秀吉はCクラスへ向かつた・・・大丈夫かな?

『ガラツ』

『静かにしなさい、この薄汚い豚共ッ！』

.....マジか?

「.....流石だな、秀吉」

「うん。これ以上無い挑発だね……」

「もう既にAクラスに敵意が向いてるんじゃない?」

てゆーか、秀吉のお姉さんってあんな感じなの?

『なつ！？何よアンタ！』

『話し掛けないで！豚臭いわ！』

うわ、理不尽だ・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数が良いからつていい気

になつてゐんぢやないわよ！何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なつ！？言つに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですつてえ  
つ！！』

いや、誰もFクラスなんて言うてないから

「ねえ、明久演劇部つて……」

妹紅言わないで……僕もすごい悩んでるから……」

「これで良かつたかのう？」

うわー、凄いスッキリした顔してるー。何かお姉さんに対して不満でも溜まつてたのかなあ・・・。

「ああ。とても素晴らしい仕事だったぜ。ホレ」

『 キイイイイイー！ ムカつくー！ 何よ調子に乗つてえー！ ！ ！ Fクラスなんか相手にしてられないわー！ ！ Aクラス戦の準備を始めるわよー ！ ！ 』

「」「」「」「」「」

・ 気を取り直してBクラス戦に向けて用意するかな

時間はけし飛ぶ！！

「ニアと壁を上手く使え！戦線を拡大せんじゃねーぞ！」

坂本君の怒号にも似た指示が飛ぶ。

「勝負は極力単教科で挑め！補給も念入りにしろよー」

「雄一の指揮の下、ここ数時間はほぼ順調かの様に見えた・・・しかし

「姫路頼んだー！」

「はい、さも・・・！？」

さつきから姫路さんがおかしい・・・なにが・・・  
あれは・・・根本君・・・！！！

その手に持っていたのは・・・手紙・・・  
そう姫路さんの・・・

「・・・姫路さんきついなら下がつていいよ？」

「え？でも・・・」

「大丈夫だから、じゃあちょっと雄一のところに行つてくるね

はあ・・・ふつ・・・面白ことしてれるじゃないか

根本・・・



第1-6話Bクラス戦3 小物の罠（後書き）

さあ、次回

お前の敗因は俺を怒らせたことだ

ジョジョネタですねわかります

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（前書き）

さて友人から頼まれたが・・・うまく書けるかな？

先生の名前変更

## 第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ……

「……雄一……」

「明久?なんだ逃げてきたのか?」

「ちょっと話がある」

「……なんだ?」

真剣な話と読み取ったのだ!「……雄一がまじめな雰囲気になる

「姫路さんを戦線から外してほしい」

「なんでだ?」

「それは言えない」

「なにか、策でもあんのか?」

「Dクラスの手を借りる位かな?あと根本君の服がほしい」

「明久お前……」

?あつ・・・・・

「いや、前回教室荒らされたでしょ?その仕返しだよ」

「……人数はさけないぞ?」

「幽香と妹紅、あとムツツリー」「がいれば」

「わかった。だが絶対成功させろよ」

「当たり前でしょ」

かてじやあ用意するかな・・・

「『ごめん待たせた?』

「いえ? 待つてないわよ」

「大丈夫だよ」

「そつか」

さてあとは・・・

『ペペペペシフ』

「はい」

『・・・準備OK』

「『ごめんなさい吉井君、お待たせしました』

「大丈夫ですよ」

さて永琳もきたしやるか!!

「じゃあ先生お願ひします!!」

「はい、試験召喚獣召喚を承認します」

「!!サモン!!」

僕は召喚獣を召喚し・・・

『ドカツ!!』

壁を殴りつけた・・・

「お前らいい加減あきらめろよな。教室の出入り口」群がりやがつて暑苦しい事この上ないつての」

「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」

「はあ？ ギガアップするのはそつちだろ？」

一 無用な心配だな

『シナリオ』

始まつたみたいだな・・・

「 そ う か ? 頼 み の 綱 の 姫 路 も 調 子 が 悪 そ う だ ゼ ? 」

お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくれ

「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だ

な  
」

『ノーベル賞受賞論文』

「・・・ もう かかるデーツンといふやうな。それにこの駒れはなんだ。ニアノンをこでんのか? おこづ 懲全部開けとせよ!」

・・・・・ 態勢を立て直す！ 一寸下がるぞ！」

み掛けろ！！誰一人生きて帰すな！！

頼むぞ、明久！！

久明 時

つぐ・・・れつきから殴つてゐるけど間に合わない・・・

「明久・・・手が・・・」

さすがにファイードバックで手がボロボロだな・・・

?てか直接やつたほうが壊せるんじゃ・・・

「三人ともちよつと距離置いてね」

「「「え?」」

ふう・・・やることは簡単だ・・・視ればいいんだ・・・

side妹紅

なんか黙つちやつたけど・・・!?まさか

次の瞬間周りが・・・殺気に、いや、でも優しい雰囲気に包まれた・  
・

これは・・・

明久を見るとその瞳は青く、いや深い蒼に輝いていた・・・

side明久

「・・・視えた」

あとは力を調整しないと壊しそうけりやつからな・・・

「ふう・・・蹴り碎く!-!」

一閃走・一鹿一

真横にきれいなまでな一直線の蹴りを壁に・・・点に数発叩き込む

『やれ！！明久』

『ドガガガガッ！！！』

『ガラガラガラ・・・』

・  
僕の蹴りは点を貫き・・・壁に人が通れる大きさの大穴を開けた・・

「な、壁を壊すなんて、どういう神経してるんだあの野郎！！」

「藤原妹紅と」

「風見幽香、Bクラス・・・」

「やらせるかああああ！！」」

Bクラスの人達が一人の前に立ちふさがった。さすがにこの人数は  
きついかも・・

「は、結構驚いたが・・・残念だつたな」

『スタッツ！』

まだだ！！

ここに少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によつてテストの結果に特徴が現れるんだが・・・  
例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史の五十嵐先生は  
採点が早い。

世界史の田中先生や生物の不知火先生は点数のつけ方が甘く、数学の長谷川先生や英語のリアン先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や歴史の上白沢先生は多少の事は寛容で見逃してくれる。

あと、基本承認に関しては西村先生と高橋先生以外は担当科目の承認しかできない

話を戻すが、じゃあ保健体育の先生はと「う」と、採点が早いわけでも甘いわけでもなく  
召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である  
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立つた

「・・・・・Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリーニと保健体育の鈴村先生だ

これで・・・

「Bクラス近衛部隊が受けますッ！」

「残念だつたな、あとはそこの雑魚だけ、お前達の負けだ！」「つぐ」

雄一が悔しそうに呻いてるけど・・・

「いや、これでいいんだよ……」

「なに？」

「そう言えども、さつきの説明だけど……実は言うと例外な人がいる。それは……」

「ハ意先生、Fクラス吉井明久、Bクラス根本恭一に現代文で勝負を挑みます」

「な、お前バカか？ 保健医がそんなこと許可できるわけ……」

「承認します」

「え？」

「それは保健医ハ意永琳は全科目の試験召喚獣の召喚を承認する」とができるということ……

「サモン……」

現代文

Fクラス 吉井明久 112点

VS

Bクラス 根本恭一 235点

「ふん、確かにちょっとは高いようだがその点数で勝とうなんて……  
・・行くぞ・・・」なつ……」

根本君の……「イツの御託なんかどうでもいい……

「一瞬で終わらせる……」「あ・・・明久切れてるね……」

「ええ、切れてるわね・・・なんか帰りたくなったわ・・・」

あっちで妹紅と幽香がなんか言つてるし、永琳が冷や汗を流しながらひきつった笑顔をしているけど無視だ！！

「！」に貴様の居場所などない・・・消え去るがいい・・・

### 一閃鞘・凶刺死獄一

一瞬で接近した僕の召喚獣は根本の召喚獣の腕と足を切り払い、そしてどどめに心臓、喉、眉間、水月に一瞬で刺突をたたきこんだ・・・

Bクラス 根本恭一 0点 戦死

「え・・・？」

「「「「「な、う、嘘だろ・・・」「」「」「」

「根本・・・」

「！？ひ、ひつ！――！」

「一つだけ言ってやる。今回の君の敗因はただ一つ・・・

「僕を・・・『俺』を怒らせた・・・ただそれだけだ・・・」

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ・・・（後書き）

ふう・・・なんとか書けた・・・

第18話 Bクラス戦 戰後対談（前書き）

やっぱ女装は外せないよねーー。

## 第18話 Bクラス戦 戰後対談

「いっつ・・・」

「ほら、もう少しで終わるから我慢しなさい」

「うう・・・永琳の口調がちょっと崩れてる・・・お、怒ってるのか？」

「お主・・・思い切った行動に出たの？」

「あはは、それもそうだね」

僕は穴のあいた壁を眺める・・・あんまり大きな穴になつてない  
みたいだね、よかつた

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。なあ、負け組代  
表？」

「・・・・・・・・」

おとなしいな・・・どうしたんだね？

「いや、明久の氣を擱てられたんだろう」

「う」愁傷をまね

「？何を話てるんだじゃ？」

「木下君は氣にしなくていいのよ」

そこまで強くした覚えないんだけど（前回の最後のセリフの時に軽  
く気当てをやっています

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前達には素敵な卓袱台をア

レゼントする所だが、特別に免除してやりんでもない」

雄一の発言に、当然周りの誰がわわつき始める

「落ち着け、皆。前にも言つたが俺達の目標はAクラスだ。IJJはあくまで『ゴールじゃなく、通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうつかと思つ』

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな」

「うわ・・・誰もフォローしないや・・・

「や」で、お前達Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試合戦争の準備が出来ていて宣戦布告して来い。そうすれば設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ、それだけで良い。ただし・・・」

「うつて雄一は・・・

「そのままじやあ面白くねえから、Bクラス代表がコレを着てせつた通りに行動してくれたら見逃してやう（笑）」

Cクラス対策で秀吉が着ていた女子の制服を取りだした。  
どこにしまつてたんだろう・・・

「さ、坂本……」

「ん？ なんだ藤原？」

「スケルト」の...  
一

「政治」

読み

「な!? 風見、趣味じやねえよー!」

雄一が幽香にいじられるのは無視しつづけ・・・それより永琳いつまで体触ってるんですか

「壁を壊すような力を使つたんですから、他のところに影響がなかつたか調べてるのですよ」

心を読まないでください

「ばつ、バカな事を言うな！」の俺がそんなふざけた事を…」  
「… Bクラス生徒全員で必ず実行させよう。」「…」  
「… 任せて！絶対にやらせるから！」「…」  
「… それだけで教室を守れるなら、やりない手はないな！」「…」

うん・・・すごい団結力だねBクラス・・・

「ニシキ」

「へつ、よ、寄るな変たぐほうつ！？」

「取り敢えず黙らせました。閣下」

「ね、ねい。おひがい」

へ～いいパンチだな・・・

「じゃ、着付けに移るとするか。明久、任せた」

「えつ、僕！？何か嫌だな・・・」

「じゃあ藤原あたりに・・・」

「わかつたやるよ・・・」

まあ、手紙のためだしね・・・

「う、うう・・・」

「あ、やっぱ・・・」

「落ちなさい」

『ガクツ』

幽香…頸動脈を絞めるつて・・・  
まあ一年の頃何かしらと近づいてきていたが、つて言ってたも  
んね

「これってどうづけるんだ？」

女子の制服なんて着け方わかんないな・・・

「私がやつてあげようか？」

「そう？悪いね。それじゃ、せつかくだし可愛くしてあげてよ  
「あ、それは無理。土台が腐つてるから」

・・・やっぱ、否定できない・・・

さて田舎でのモノは、つと

「・・・あった」

「何があつたんだ？」

「うわつ！？・・・何だ妹紅か・・・脅かさないでよ

「え？あ、『じめん。それよりその手紙何？』

僕の持つている手紙を見て妹紅が聞いてくる。あ、そーか妹紅達知らないんだ

「姫路さんの手紙だよ」

「ふうん、渡しとこうか？」

「そうだね、お願い

さてと皿洗でのものは見つかっ・・・

『ガラツ・！』

「失礼します」

「え？上白沢先生どうしたんですか？」

慧音が来たことにみんな驚いてる・・・  
あ、やばいかも・・・

「ちよっとね・・・あ、いた（二）」

「！？」

慧音が笑顔で「ひに・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いから・

『「ゴシン――』』

「…………？」

やパリ、こノ頭突きは痛イ！！

「いくぞ、明久……」

「け、慧音……□調……」

「妹紅、黙つときなれ。巻き添え食らうわよ……」  
「幽香……」

『ズルズルズル、ガラツ！』

あ～痛みで口調が……それよりこの後説教か……

s i d e 妹紅

「な、なんなんだあれ……？」

「いや、慧音がマジギレしてただけ」

「そ、そうか……」

うん、坂本あんまり突っ込まなくて正解だ

さてこの服は……ごみ箱に入れとくか……手紙、姫路さんに渡しに行くかな。

少女移動中

「よつ、姫路さん」

「…? ふ、藤原さんですか?」

「ハイこれ

「！？これは・・・」

「事情は何となく察してゐる。あ、大丈夫だよ？明久は何も言つてないし中も見ていないから」

「その・・・吉井君は・・・？」

「慧音に説教されてる、まあ今日のはやりすぎひやつたからね」

「そうですか・・・ほんと吉井君って優しくなさりますよね」

「・・・そうだね」

私がどういう存在かしいても受け入れたり、10救うために自分を  
かえりみないほどだけどな・・・

「その、藤原さん

「？なに」

「藤原さんは吉井君のことが・・・好きなんですか？」

・・・

「好きよ。私だけじゃない幽香もね」

「そう、ですか・・・」

「でも・・・」

「？」

「幽香もそうだけど、私達は『明久の相手は明久自身が決める』こと『  
だと思つてるの』

「・・・強いですね・・・」

「強くないわよ・・・まあ、私にできる」とは選んでもうべつのよう  
に頑張ることくらいだけね

全然気づいてくれないけどね

「・・・・・」

「さて・・・帰るか・・・あ、あと姫路さん」

「なんですか?」

「私のことは妹紅でいいよ」

「じゃあ、妹紅ちゃんって呼びますね」

「ちゃんつて・・・まあ慣れるしかないか・・・じゃあね」

「はい」

さて幽香と合流して明久を迎えて行くかな

第1-8話 Bクラス戦 戰後対談（後書き）

おまけ

ただいま説教中

「壁を召喚獣といえ、素手で殴るとなんど殴っていいんだが…。」

「いや…・・・なんていうか、ね？」

「・・・・お願いだ・・・・」

「え？」

『ギュウッ』

ふいに抱き締められて・・・これは・・・涙？

「お願いだ・・・・私達をあんまり心配させないでくれ・・・・」

「・・・・うん・・・・」めんね慧音

ホント僕って女の子の涙に弱いな・・・

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合（前書き）

題名の通り

紅魔館、紅い霧編後となつております

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合

吉井明久こと僕はとても悩んでいた・・・

「なんか能力に目覚めたのはいいけど・・・名前もわからないし、鍛えようにもどうすればいいのか解らないしな・・・」

能力の一つである『』って場所に行つたことによつて目覚めたこの能力

なんていふかスイッチ？みたいなものを切り替えると視界に点と線が見え、線を切るとどんなモノだらうと切ることができ、点をつくとあらゆるものを見ることができるという能力・・・

僕はこれに目覚めてから結構立つけどどうすればいいのか答えが出しができず、森を歩いていた・・・森？

「あ・・・迷つたああああああああ！」

どうしよう・・・？あれは・・・人！？まさか同じように迷つた・・・

その人は妖怪に追いかけられていた・・・

「くつ！」

何か出来るわけではないが・・・追いかけなきや！-

しかし……そこで見たのは妖怪に襲われる人ではなく、妖怪と対等に戦い、ましてや倒している人だった……それ以上に

「……す、」「いな……」

その人はたった一本のナイフで妖怪を解体していく、乱雑にではなくあまりにもきれいな動きで……  
いつの間にかその戦闘は終わっており、その人は僕を見ていた……

s i d e ? ? ?

はあ……空間を飛んでみればいきなり魔物？に襲われるしついでないな……

そこにはいつからいたのだろうか、中学生くらいの少年がいた……！？な……いやこれは……魔に対して感じるものじゃなくて……なんていうんだろうか……  
まるで同類にあつたような……  
まあいいか

「えつと君、ちょっとといいかな？」

「え？あ、なんですか？」

「ここに永遠亭つてとこがあるって聞いたんだけど……

「ありますけど……それよりお兄さんその田……」

あ、いけない聖骸外したままだった。

「僕と似たような目ですね」  
「……え？」

今この少年は何て言つた?」の『直死の魔眼』を『僕と似たような』?

「あ、いや『氣のせ』ね、君……線と点が見えるのかい?」え、はい

「わづか……」

なるほど……さつきの感覚はそういうことか……でも、何だかおれとは違うような……

「すまないけどそれについて詳しく教えてくれないかな……?」「え? あ、いいですけど……

・・・? あ・・・

「ああ、『めん。自己紹介がまだだったね。俺は……』

「遠野志貴、ちょっとした物探しの旅人だよ」

s.i.d e 明久

互いに自己紹介をした後、志貴さんがここに来た理由と僕がこの能力に目覚めた経緯を話した。

「まさか、先生が前言つてたどこ? でも彼はそれよりも……

「えつと……志貴さん?」

「ああ、『めんそれについてだったね』

それは『直死の魔眼』と言つて物の死を点や線としてみる力なんだよ

「物の死……」

「怖い……かい？」

なんていうんだろう……確かに怖いかと言われば怖いけど……

「僕は約束したんです。たとえどんなことがあらうと前に進み続けるつて……」

「……」

「それに……」

「それに？」

「これは間違いなく僕自身の力である意味自分自身です……それを否定するなんてバカみたいじゃないですか」

「……」

「?.どうしたんですか？」

いきなり黙り込んだけどどうしたんだろう……

s.i.d e志貴

驚いた……自分自身だから否定するのはバカみたい……

「ふつ」

「？」

「あはははは……！」

「な、なんで笑うんですか！……」

「いや」「めん、ふふそーが自分自身か……」

まさかこんな小さい子から教えられるなんて俺も歳かな・・・まあもう100はいってそうだけど・・・

「あ、その・・・志貴さん頼みがあるんだけど・・・」

「?なんだい」

「僕に戦い方を教えてくれませんか?」

「・・・なぜだい?」

「僕は、守りたい人たちがいるんです・・・」

「・・・」

「それに僕は前に進み続けるつて誓つたから・・・」「力を手に入れるつてことは他人を傷つけるかもしれないってことだよ?」

「・・・」

「それに逆に傷つけられる覚悟もいる。もしかしたらその守りたい人を守れないかもしねない」

俺は・・・守れなかつたから・・・

「それに力を手に入れるということはそれだけ過酷だということ、場合によつては死ぬかもしねないんだよ?」

「ですね・・・でも・・・」

「僕は、何も努力しないで守れなくて後悔するよりも、何かを守るために血反吐を吐くような努力をするほうがましだ」「それで守れたなら最高ですけどね」

・・・・・人によつては夢、理想つて言つかもしねないな・・・

「大怪我するかもしねないよ?」

「今さらですし、覚悟の上です」

「最悪死ぬかもしれない」

「死ぬ覚悟でなんかしません、絶対生き残つてやります」

「・・・・・」

はあ・・・「これはここで使つても動かないだろ? な・・・

「はあ・・・負けだ」

「え? ジヤあ・・・」

「いいよ、教えてやるよ。ただしあんまり期待するなよ?」

「はい! -! -!

でも、こんな子にあんな思いはさせたくないし、大人である俺から  
教えることは教えようかね・・・

「まあ、話も決まったことだし明久」

「?なんですか?」

「永遠亭まで案内してね?」

「あつ・・・・・」

本当に大丈夫かな・・・

s i d e 明久

志貴さんに弟子入りしてから毎日訓練を行つた・・・

それこそ本当に血反吐を吐くような毎日。妹紅達やお母さん達とも心配とかしてたけど、

僕はそれを説き伏せて毎日志貴さんのところに通いつめた。

志貴さんいわく体力面や肉体能力に関しては基礎ができているから

後はどううまく体を使えるかが問題らしい。幽香・・・君の特訓いじめのおかげだね・・・

志貴さんに技の基礎を教えられたり、組み手をしたり・・・はつきり言つて折れてない骨とかないんじゃないかと思う。でも僕はあきらめなかつた・・・  
だつてあきらめたら必死に教えてくれる志貴さんにも失礼じゃないか。

ある程度したころ・・・僕は技・・・七夜の技術の伝承が始まった。

### side 志貴

最初に言おう異常だ・・・体力面等もそうだが（それを言つた時明久は遠い目をしていた）まあ、これは『』に到達したときに身体能力等自体も強化されているのかもしれない（ゼルレッチさんがそんなことを言つてた気がする

だが問題なのは学習能力だ。教えた動き、技、道具の使い方、体の使い方、魔眼の使い方をまるで水を吸い取るように、しかも限界なく吸収しものにしていくのだ。  
何より・・・それは技を教えていたときに起つた・・・

「志貴さん」

「ん?どうしたんだ?」

「実は見てほしいものがあつて・・・」

そう言つと明久は刀を構え・・・

「・・・散れ・・・」

一 閃鞘・散華時雨一

「・・・なつ・・・」

「八点衝とかを刀とかでしようとしたら難しくて考えたんですけど  
どうですか?」

「・・・自分で考えたのかい?」

「はい!・あ、これのすごいところは密度を変えると範囲を変える  
ところなんですよ」

七夜の技から新しい技を作る才能、そしてそれを完成とまで昇華さ  
せる技術・・・

本当にこいつは人間なのか?

s i d e 明久

師弟なつて1年くらいたつた夜・・・僕と志貴さんは森で試合をし  
ていた・・・

『キン!・ドカツ!・』

「ぐつ!・!・!・」

「・・・隙だらけだ」

— 閃鞘・八穿 —

志貴さんが視界から外れ・・・真上から斬りかかってきた

「蹴り穿つ!・!・!・」

— 閃走・六兎 —

僕はそれに対して瞬間的に六発蹴りを叩き込み志貴さんを吹き飛ばすも・・・志貴さんはひょいと受け身を取り・・・

「遅い」

一閃鞘・一風一

僕の胸あたりに肘を叩きこみ、そのまま後ろに投げ地面に叩きつけた

「がはっ！？？？」

頭から叩きつけられていたら死んでいただろう・・・

「はい、ここまで」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふう、でも本当に強くなつたね」

「まだ志貴さんに決定打入れれませんけどね・・・」

「あはは、弟子にそんなに簡単に抜かれてたまるかよ。」

「うう・・・でもやっぱ一撃くらこりちゃんと当たいたいな・・・

「・・・明久・・・」

「なんですか？」

「俺は今日ここを出る」

「・・・やつぱりですか・・・」

「?わかつてたのか？」

「だつてこきなり試合するそつて言われたらわかるでしょ」

ホントは信じたくなかったけど・・・

「俺が教える」とは教えた。あとでお前がどう昇華をせむかが問題だ」

「……はい……」

「でだ、お前にこれをやるついで思つてな」

そつと志貴さんが取り出したのは……

「い、これは……でもこれって志貴さんのじや……」

『七夜』と刻みこまれた金属棒……仕込みナイフだった……

「あ、これはなまあ物探ししてる途中の世界で拾ったものなんだが……」

「この持ち主……『俺』がどうなったか知らない。もしかしたらこれを使わなくていい生活をしているか、もうどい昔に死んだかもしれません。倉庫で見つけたからな」

「それって泥棒じゃ……」

「だがこのナイフは頑丈でな。吸血鬼の一撃をくらつても刃こぼれすら起こさない」

話をそらした……

「俺が2つ持つても仕方ないし、こいつも使われるのが本望だらうし」

「……」

「それに師匠から弟子に送れる物として明久に受け取つてほしい

「……はい」

それを受け取つた時、持ち主のいろんな思いを感じた気がした

「・・・・・

『カシャー！－チャキッ』

「あー」。まるで合わせたかのように手になじむ・・・

「さて渡すのは渡したし・・・自主練怠るなよ?」

「はい。志貴さんもお元氣で、姫様よくなるといいですね」

「あの姫様は気ままだからね。じゃあな」

そう言つて志貴さんは懐から出した宝石剣で空間を切り裂き消えて行つた・・・

「ふう、とうとう今日、Aクラス戦か・・・」

しかし懐かしい夢を見たな・・・あれからいろいろなことがあった・・  
自分の能力がわかつたり、この田の本当の正体がわかつたり、新しい仲間ができたり・・・

「志貴さん、僕は今を進んでいますよ」

僕は制服にいつもどうり志貴さんから受け取った『七ツ夜』ポケットに入れ、

大切な仲間達が待つロビーへと向かった

やばい、志貴のしゃべり方が……

今回は明久の過去についてでした。

明「やつと僕のことが出てきたね  
うん。文才なくてごめんね……」

明「大丈夫だけど……」

・・・首吊つてくるわ……

明「やめろ！！」

次回からAクラス本編です。

この話の明久の持つてる七ツ夜ですがパラレルワールドの倉庫にあつたのをお姫様の吸血衝動を抑えるためにいろいろと世界を飛び回り、たまたまだり着いた志貴がうば・・・拾つてきた物ですあと時間に関しては明久の学習速度がおかしいだけです

第19話 Aクラス戦前 Fクラス（前書き）

Aクラス戦前の交渉前の話です

## 第19話 Aクラス戦前 Fクラス

Bクラス戦から一日経つて、Aクラス戦について雄一からの説明が始まつた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」

「……こいつは誰だ？ 雄一の皮をかぶつた別人か！？」

「なんだよ？ ゴリラらしくない」

「いい加減その呼び方やめてくれないか？」

「……で坂本。どうしたんだよ、らしくねえ……」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強さえすれば良いってモンじゃねえっていう現実を、成績だけが全てとしか見てねえ教師共に突き付けてやるんだ！」

「……」

「でも努力ぐらいしようね……」

「皆、ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと考えている」

「どういう事だ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

雄一の言葉に、教室中にざわめきが広がつた

「落ち着いてくれ。それを今から説明してやる」

そ、うは、書つてもどうかねのかしら？

「まず、戦るのは当然俺と翔子だ！」

代表同士の一騎討ち。まあ、当然と言えば当然よね……でも

普通にやつて今に雄一が勝てるわけ……

ヒニッ『（雄）が明々にガッタリナイフを投げる）

・ハシツ ピニッ!!』(奴隸がギャツチし投げ返す)

（和モ一にては奴一はヘンを扱ける）

「それでは、何がでめえだらう？」

確かにそうね、それに

「今度明久に同じことしたら・・・アテルワヨ?」

「マジで下さいませんでした」

「ま、まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。あとでに戦り合えば勝ち目は無いかも知れない」

だったら、カッター投げないでよ

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろ？？まと  
もに戦り合えば俺達に勝ち目は無かつたが、俺達は今こうして勝ち  
進んで来ている。今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、Fクラスは  
Aクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。俺を信じて任せ  
てくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「――「おお～！！！」」「（（（いや、無理でしょ・・・）））

あら？なんだか明久と考えが重なつたような・・・

「さて、具体的なやり方だが・・・、一騎討ちではフィールドを限定す  
るつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は  
100点満点の上限有り。召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とす  
る」

ふ～ん、何か秘策でもあるのかしら？

「でも、同点だつたら引きつと延長戦だよ？そつなつたら問題のレベ  
ルも上げられるだろ？し、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじや」

「まさか運任せとか言わないよな」

「おいおい、お前達。あまり俺を舐めるなよ～いくらなんでもそこ  
まで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか」

「じゃあ、雄一は霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」「アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろ？」

あら、まるで霧島さんのことなら知ってるよつた口ぶりね・・・

「雄一よ、あまり勿体振るでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「ああ、すまない。前置きが長くなつたな」

「俺がこのやり方を探つた理由は一つ。それは、『ある問題』が出ればアイツは確実に間違えると知つていてるからだ」「ある問題？」

「ああ。その問題とは・・・『大化の革新』

「大化の革新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？小学生レベルでそんな問題が出てくるのかな？」

「いや、そんなに掘り下げた問題じやない。もつと単純な問題だ」「単純とこうと・・・起こつたのは何時代かとか？」「もしくは年号とかかのう？」

「お、ビンゴだ秀吉。お前の言つ通り、その年号を問ひ問題が出たら俺達の勝ちだ」

そんなことまでいくのかしら・・・

「簡単な問題なんだが、翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ちとなり、晴れてこの教室とオサラバつて寸法だ」

「（）自信ね・・・それよつさつきから気になつてたけど・・・

「あの・・・」

「なんだ？姫路」

「坂本君って、霧島さんと知り合いなんですか？」

それよ。さつきから「アイツ」とか言つてゐしね

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「總員狙えええええ——つ——！」

あ～また！」つらは・・・

「なつ！？何故須川の号令で皆一斉に武器を構える！？」

黒れ男の敵！Aゲーテの前にギザマを殺すッ！」

「男と女!!『愛』

一男どはツ!!『愛』を捨て『哀』に生きる者成りツ!!それをキサマ  
は汚らわしき欲望を以て気高き才色兼備の霧島翔子を唆し、我等の  
株の定を踏みこじつたのござツ!!

死をツ ! ! 「 「 「 「 「

・・・ハア・・・ここにはバカしかいないのかしら・・・

「訳分かんねえ！何だよ血の盟約つてー？つまらビデウこの事だよ！」

「「「「「霧島翔子と幼馴染なんて羨ましいじゃねーか」の野郎ツ

ぐだらないわね・・・

「それ言つたら明久はどうなる！！風見と藤原と幼馴染で、上白沢先生や八意先生とも聞いてる限り仲いいんだぞ！？」

「なー? 雄一おま・・・  
「「「「 云々心躍る

「『異端者』！」

『シユカカカカツ！！！』

「お前ら……」

貴方達

明久に手出したらどうなるか解つてゐるよな（わかつてゐるわよね）

はあ、呆れてこの頃溜息が多いわ・・・

「あの、吉井君」

「ん？何？姫路さん」

1

「けど好みかと言われたら……って、ええっ！？ 何で姫路さんが

僕に対して攻撃態勢取つてゐるの！？そして美波！？君は何故教卓なんて物騒な物を業こ殺すつゝようとしてゐるのさ！！業が一体何をし

たと！！

「吉井君にはお仕置きが必要な様ですね」

賞讃しない万キ その性格を叫き直してあけるね！

「あと話を聞くついで」ともね

私と妹紅は一人を抑えつける

記憶が確かなら姫路つて子もつかよつとまとも子だと思つてたけど

氣のせいだったのかしら・・・

s i d e 明久

なんとか命の危機を脱出すると

「まあまあ。落ち着くのじゃ臨の衆」

「冷静になつてよく考えてみるが良い。相手は『あの』霧島翔子じやぞ? 『ぐり』幼馴染とはいえ、男である雄一に興味があるとは思えんじやうづが」

「まあそれもそうだな・・・」

「むしろ興味があるとすれば・・・」

さつきまで暴走してたFクラス男子が一斉に姫路さんを見る

「な、なんですか? もしかして私、何かしましたか?」

「いやいや。別に何も」

「何もしてないけど、何かされる可能性が・・・」

「え?」

「――『いいえ、何でも!』」

「? ? ?」

やつぱりみんな噂を鵜呑みにしてるみたいだね・・・

「とにかくつ! 僕と翔子は幼馴染で、俺達が小さい頃に俺がアイツに間違えて『大化の革新は625年』って教えていたんだ」

「貴様ツ!! まだ幼くて何も知らない純粋無垢な霧島さんに嘘の情報教育をしていやがったのかツ! ..」

「何て外道な奴なんだ!!」

「・・・・・許されざる行為・・・」

「ええーい、もつ何とでも言えーー取り敢えず今は黙れーー話が進まんーー」

どんまい、雄一

「アイツは一度覚えた事は絶対に忘れない。だから今、学年トップの座にいる。しかし、今回はそれが仇となるんだ！」

雄一が黒板をバンッと叩いて皆の注目を集める

「俺はそれを利用してアイツに勝つーーやつしたら俺達の机はーー

「システムテスクだつーー」

そうつまくいくかなーー

第19話　Aクラス戦前　Fクラス（後書き）

交渉まで行きたかったが一分割。

第20話 Aクラス戦 交渉 メイド服との恋愛（前書き）

今回明久の能力がちょっとわかります

## 第20話 Aクラス戦 交渉 メイド長との会合

「一騎討ち?」

「ああ。FクラスはAクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む」

今回の交渉は雄一が行っている。ちなみに一応僕、幽香、ムツツリ一一、姫路さんは付き添いだ。

で、Aクラスから交渉に出てるのは秀吉の姉の木下優子さん、ホント見た目じゃどうとか分かりにくいね・・・

「うーん、何が狙いなの?」

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのにはありがたいけどね。だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」「賢明だな」

「ここまで予想通りだね。ここからが交渉の本番。

雄一君の腕の見せ所だよ?」

「ところでFクラスとの試召戦争はどうだった?」

雄一は腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけよ?何の問題もなし」

「なるほどな。ところでBクラスとやりあつ氣はあるか?」

「Bクラスって・・・・・昨日来ていたあの・・・・」

「ああ。あれが代表をやっているBクラスだ。幸い宣戦布告はまだ

されていないようだがさてさて。どうなることやら」「でもBクラスはFクラスと戦争したから三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね?」

確かにルール上そうだけど・・・

「知つていろだらう?事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになつていてる。規約には何の問題もない。・・・・BクラスだけじゃなくてDクラスもな」

例外もある

「・・・・・それって脅迫?」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

木下さんは考え込むように黙る・・・

仕方ない

「木下さん、じゃあいつこいつのはビリ~」

「?なにかしら?」

「お互ひ7人、7VS7の一騎打ちを行つて、最初に4勝したほう  
が勝ちっていう方法なんだけど」

「な! おい明久! 何を勝手に・・・・!」

「でもこの提案が却下されたら全面戦争になるかもしちゃないよ? だ  
つたらちょっとでも勝ち目がある方に妥協した方がでしょ?」

木下さんは少し考えた後

「う~ん・・・いいわ。吉井君の案なら? んであげてもいいわよ」

「本当か？」

「ええ。それならこちらのリスクも結構小さく出来るしね。」

「……はあ、仕方ない。けど、勝負する内容はここで決めさせてもいい。それくらいこのハンデはあってもこにはすだ。」

さすが雄一。あくどい

「え？ うーん……」

「…………受けてもいい。」

「…………雄一の提案を受けてもいい。」

代表の登場だね……

「あれ？ 代表いいの？」

「…………そのかわり、条件がある。」「

「条件？」

「…………うん。負けた方は何でもこいつ事を一つ聞くべ。」

そう言いながら翔子は雄一の後ろにいる瑞希を直踏みするよじつくりと観察した。

そこでムツツリーニはカメラを準備した。

「土屋君、早くそれしまわないと…………壊すわよ。」

「…………（サッ）

さすがに壊されたくはないよしだね、まあ、僕自身幽香が言つ前に壊そつかと考えたけど…………

「じゃ、こうしよう。勝負内容は二つの内4つをうちで決めさせてあげる。あと二つは二つで決めて。」「…………」

「そうだな・・・わかつたそれで行こう

「開始はいつ?」

「補給テストをもう一度受けたいからな、昼からだ」

「わかつた」

さて、話も終わつたしかえ・・・

その時僕は銀髪の少女に気がついた・・・  
そしてその手に懐中時計が・・・

『力チツ』

その瞬間みんなが時間が止まつたように動かなくなつた、いや実際に時が止まつてゐるんだから当たり前か・・・

「よかつた。気づいてたみたいね」

「何言つてるのさ、思いつきり目があつてから時を止めたじゃないか、咲夜」

彼女は十六夜 咲夜。幻想郷の紅魔館のメイド長で、『時間を操る程度の能力』を扱う

「だって貴方、認識しないと周りと同じ状態になるじゃない

「うつ・・・」

そう僕の能力だが意識していれば咲夜の止まつた時間の中に入れるが、気づいてないと発動しないのだ・・・

「それよりいつのまにここに?」

「2年の始まりくらいに転校生つてことで來たわ」

「へ～」

「やつぱり・・・明久、貴方Aクラス見に来た時私に気づいてなかつたでしょ」

「ハイ、誠に申し訳ございません」

本気で気付いてなかつた・・・

「まあいいわ。それより紫さんから伝言なんだけど」

「え？ 紫から？」

「今回の試験召喚獣で私達にちょっとした実験を手伝つてほしいそうよ」

八雲 紫。幻想郷を作つた張本人で『境界操る程度の能力』を扱う妖怪である。

みんなからは胡散臭いとか嘘つきと言われるけど、僕はそう感じたことがない。

彼女いわく「なぜか明久に対してだと本音とかほろぼろ出ちゃうのよね・・・」と言つていた。

あと、彼女にとつて僕は天敵みたいなものらしい。

それ以来僕の2つ名に「紫専用最終兵器」というものがついた・・・で話は戻すが、僕がこの学園に入ったのを知つてから紫は何かしらと技術提供をしたりしてスポンサーみたいな立ち位置にいるそうだ

「そりか・・・わかつたよ

「・・・明久・・・」

「なに？」

「本気でやつてね？」

・・・

「何言つてゐのさ・・・」

「・・・」

「咲夜とやる以上本氣を出すに決まつてゐでしょ」

「・・・ふふ、そうね。ありがとウ」

「じゃあ、今度はクラス戦で」

「ええ、待つてゐわ」

『力チツ』

「? 明久どうした?」

「何でもないよ雄一」

「明久・・・」

後で説明するよ幽香・・・

「じゃあ戻りうつか」

今回の補給テスト『本氣』でやらないとな・・・

## 第20話 Aクラス戦 交渉 メイド長との会合（後書き）

さあ、今日は咲夜との会合でした。

あと補足ですが明久が紫の天敵な訳は、  
紫の境界を操る能力が明久の直死の魔眼とも一つの能力とともに  
相性が悪いからです。

例

境界を扱おうとする 境界を殺して扱えなくなる

第21話 Aクラス戦1

夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

妹紅編！！

## 第21話 Aクラス戦1 夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

とつといひの時が来た…

「準備はよろしいですか?」

立会人はAクラス担任であり、学年主任の高橋先生が行うみたいだ…

「大丈夫だ」

「…はい」

「では今よりAクラス対Fクラスの試合を開始します」

「始まつたね」

「そうですね」

「ところで何で上白沢先生がここに?」

美波ナイス質問

「貴女達の担任だからですよ」

さいですか…

「では両クラス代表は前へ」

「ではわしがいくかのう」

「じゃあ、私が行くわ」

姉弟対決か…

「では一回戦を開始します」

「秀吉、じクラスの小山さんってしつついる?」

「え?誰じゃったかのう?」

小山さんって言えば代表の…

「ちょっとひたちに来なさい」

優子さんは秀吉を連れて裏に行つた…

『どうしたのじゃ姉上?』

『あんた私に変装してブタどもが、とか言つたらしいわね…』

『あれはわしなりに姉上ならこいつだらうと…って姉上…腕はそ  
つちには曲がらな…』

…

「『めんなさい秀吉体調が悪いみたいで休んだわ』

といつあえず、行つてみるか…

s i d e 妹紅

明久は…行つたか…相変わらずだな

しかし秀吉の姉つてバイオレンスだな…

「はあ、演劇なんて馬鹿な」とばかりして…勉強を疎かにするなん

て恥じもこいとひだわ

…「マイッ…

「どうする？」

「仕方ない、先生この試合…ちら「待つて…」ふ、藤原?どうした  
?」

「あら、貴女が相手?」

「先生、教科は歴史で」

「では、初めてください」

「力の違いを見せてあげるわ」

なんか言つてるけどいいや

「最初に言つておきたいことがある」

「何かしら?」

「私は…」

とりあえず

「夢に向かつて努力する奴を侮辱する野郎は大嫌いなんだ!…」

燃やす!!

歴史

Fクラス 藤原妹紅 412点

V S

Aクラス 木下優子 337点

「 「 「 「 400オーバーだと…?」 「 「 「

「な、貴女…」

：

「能力発動」

藤原妹紅 312点

「どうこうつもり?」

「どうでもいい、やるが!」

「…舐めるな!」

私は炎をぱりまき、あつちはなんとか避けながら槍で攻撃してくる

「…」それで終わるよ…。

私の炎はあつちの召喚獣の腕を焼き、あつちは私の召喚獣の胸を槍で貫いた…

「勝った…」

喜んでると悪いけど…

「リザレクション…」

「え?」

『ボツ…』

「！？」

召喚獣が炎にかこまれ、火の羽がはえた状態で復活した…

藤原妹紅 212点

V S

木下優子 102点

「嘘…」

「燃えろ・・・」

召喚獣は巨大な炎塊を優子の召喚獣に投げつけた。

木下優子 0点 戦死

「なんで？確かに止め差したのに…」

「私の腕輪の能力はな…100点を払うと、200点元の点数から引かれるが一回だけ復活できるんだよ」

「…」

「木下…」

「何かしら」

「秀吉謝れよ。確かに悪乗りしたあいつも悪いけど」

「そうね、私のさつき言つたこと失礼よね…」

「では1回戦Fクラスのし「負けでいいよ」え？」

「な、なに言つてんだ！！藤原」

なんかゴリラが言つてるけど

「だつて私乱入しただけだし」

「確かに木下君の代わりに出るとは言つて無いですね」

さすが慧音、私が言つてること理解したみたいね

「では1回戦Aクラスの勝利とします」

あ、明久も帰つて来たみたい出し戻るか

## 第21話 Aクラス戦1 夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

おまけ

「秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「さつき馬鹿にして、めんなさいね」

「別にもうよい」

「藤原さん強いわね」

姉上：

「多分それは明久が理由だと思つぞい」

「吉井君が？」

「つむ」

『明久、勝つたけど負けたぞ』

『妹紅なに言つてゐの？とか抱きつかな…』

わしは明久を見ながら姉上にそう言つた

第22話 Αクラス戦2 もじたんは壱子（前書き）

もじたんがエフされました  
今回のお話は  
カオス  
三頭身  
たれパンダ  
でお送りします

## 第22話 Aクラス戦2 もいたんは帽子

今の状況をお伝えしよう・・・

「うひゃー」（明久の頭の上でたれパンダ状態のもいたん）

「久しぶりに見たわねこれ・・・」

「そうですね、この頃この状態になることなかつたですから

慧音・・・懐かしそうに言わないでどうにかして・・・  
じやないと・・・

「「うまいようかしら（まじょつか）・・・」

だから僕は君達のペッシュじゃないって・・・

「「「「死死死死死死死死」」」

そいつるさこよ

「なあ・・・藤原が三頭身みたいになつてるような気がするんだが・

・・・

「創作物の話だから仕方ないわ」

雄一がまともな意見・・・そして幽香メタ発言しない

「ホントうつ見ると人形みたいね」

永琳・・・でかいつの間に来たの！？

「ちよひと紫さん」に呼ばれてね

そこですか・・・でか心読まないで・・・

「では2人田どうぞ」

「じゃあ須川頼んだぞ」

「俺か?」

「ああ、藤原はもう出れないからな」

「ふ・・・本気を出せつてことだな・・・」

「ああ、逝つてこ!」

雄二・・・漢字違つよ・・・

「なんじや?」この空氣は

「あ、秀吉おかえり。お姉さんは何て?」

「わざの謝罪だそづじや、。それより明久治療ありがとうなのじ

や

「気にしないで、最初の原因は雄一だから」

「しかし、異様に手馴れておつたのう、あとあの救急セットはばい」

から出したんじや?」

「それは・・・」

うへんどうしきよつ

「吉井君が治療がうまいのはハ意先生から習つてたからですよ」

「どうじつことですか?上白沢先生」

「言つたまんまよ。明久はハ意先生の弟子みたいなものなのよ」

「いや、別に弟子つてわけじゃないんだけどね、幽香」

「さうね、もう吉井君ほんどの治療の仕方と薬の調合覚えてるも

のね?」

永琳！？

「明久が？ありえんだろうこのバカが」

「 「 「 確かに」 」 」

「あら、貴方達シニタイノカシラ？」

「 「 「 「 すいませんでした」 」 」 」

「あの・・・」

「 「 「 はい？」 」 」

「早く3人目でてくれませんか？」

「 「 「 「 え？」 」 」 」

須川君・・・瞬殺だつたんだね・・・

「・・・・・俺が行く」

「おう、ムツツリー二頼んだぞ」

「了解」

ムツツリーは科目選択に保健体育を選ぶだろう。

保健体育だけでムツツリーは総合科目の点数のうち80%を占めている。

その単発勝負ならAクラスにだつて負けはしないだろう

「じゃ、僕が行こうかな」

?知らない子だな?

「1年の終わりに転入してきた上藤愛子だよ。ようじくね

「教科は何にしますか？」

「 · · · 保健体育」

「土屋君だけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんがムツリーに話し掛けれる

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？・・・・・キリとは違つ

実技でね

「ムツリニシテ」  
一ノ二  
著者 挿圖

な  
しきなり鼻血出して倒れた！？？

「ちょっと、大丈夫！？」ムツツリー二

問題ない

いやどう見ても瀕死だから・・・

「そつちのキミ、吉井君だつけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかつたら僕が教えてあげようか？」

「もせさん、実技でね」

勉強も要らないわよ。」  
「…………

「そうです！永遠に必要がありません！」

なんだろうすゞく失礼な気が・・・

「アーティスト」

もこたん人間の言葉喋らうね。てかそろそろ戻らうよ・・・

「やつね妹紅の言つとおつ・・・・」

え？ 幽香今言つたことわかつたの！？

『ギュッ

۲۷

一  
ちゃんと相手がいるから問題ないわ

「」「」「」「」

翻が包みの季の心の歌

「あ、確かにそうだね」

?みんなどうしたんだ?

「え・・・吉井君つて・・・」

工藤さん? 何驚いてるんだろ? ・・・ だつて

「え？ 保健体育の『実技』って体育のことでしょう？」

۷۱

あれ？僕何か変なこと言つた？

「・・・まあセレハ辺はあとで教えてあげるから吉井君、気にしないでいいわよ」

「は、はあ・・・」

「「「「八意先生と個人授業だと！？」吉井許すま・・・」「  
「はいはい、黙りなさい・・・・」

「「「「Yes sir・・・」「」「」「」」

うん？

「そろそろ召喚してください」

あれだけの騒動にも関わらず、高橋先生は冷静だな・・・

「はーい。サモンつと」

「・・・サモン」

二人の召喚獣が姿を現す。

ムツツリー二の召喚獣は隠密スタイルで武器は一本の小太刀。対して、工藤さんの召喚獣は…。

「なつ、何だあの巨大な斧は！？」

見るからに破壊力抜群そうな大戦斧に加え、腕輪まで装備している。見るからに強そうだ

「では第三試合、始めつ！」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ

「…………その必要は無い」

「えつ？ 何で？」

「…………工藤愛子、お前では俺には勝てない」「へえ～、自信満々だね。けど つ！」

「工藤さんの召喚獣はものす」「スピードでムツツリーの召喚獣に突っ込んできた

「それじゃあ、バイバイ。ムツツリー君つー」

そして斧を振り上げムツツリーの召喚獣を両断・・・いや、そんなことないか・・・だつて・・・

「…………『加速』」

『ムツツリー』だし

ムツツリーはそれ以上のとてつもないスピードで工藤さんの召喚獣を切り捨てていた・・・

「・・・・え？」

「…………『加速』、終了」

#### 保健体育

Fクラス	土屋康太	572点
VS		
Aクラス	工藤愛子	446点

「す」「スピードだな・・・」

「そうね・・・20回かしら?」

「何がだ?」

「切った回数よ」

「――――え?」

「正確には24回」

「へへ私には幽香と同じ20回しか見えなかつたや

あ、妹紅元に戻つてゐ

「な・・・何言つてんだ? 明久」

「・・・・・明久・・・全部見えてたのか?」

「うん、どにを切つてるかも切り方も全部見えてたよ」

志貴さんのほうがやっぱ切り方は正確かな・・

「ムツツリーーー、まさか・・・」

「・・・・・切つた回数24回」

「「「「「・・・・・」」」」

「しょ、勝者、Fクラス」

高橋先生・・・Aクラスだから絶対負けないってわけじゃないんで  
すから・・・

おまけ

「とじろで妹紅」

「うん?」

「いつまで抱きついてるの?」

「気が済むまで『ギュッ』」

「そう。まあ別にいいけどね・・・

「・・・(妹紅の奴いな・・・)」

「・・・(勢いとはいえ明久に思いつきり抱きつこちやつた・・・

／＼＼＼＼

「（私も頼んで抱きついでみよつかしら・・・）」

「（ほんと明久君変なとこで天然なんだから・・いつその事本氣で実践しようかしら・・・）」

「アキ・・・」

「吉井君・・・」

なんか美波と姫路さんから不穏な空気が・・・  
ハア・・・咲夜との試合まで生きてられるかな・・・

## 第22話 Aクラス戦2 もじたんは帽子（後書き）

やつぱりいろいろとフラグを立てる明久でした。

え？ 手紙？ 友人からか・・・なになに・・・

明久はもこたんから後ろから抱きつかれてるならすなわち胸が・・・

『蓬莱』凱風快晴 - フジヤマ、ヴォルケイノ - 『』

作者はログアウトしました

第23話 Aクラス戦3 燃え须きたか・・・(前書き)

注意 久保君にはお気を付けください

第23話 Aクラス戦3 燃え尽きたか・・・

「で、では4人目の方前へ」

「じゃあ姫路頼む」

「あ、は、はい」

「雄二に言われて姫路さんが前へ・・・? FFF団? 幽香がそこで山にしています

「姫路さんの試合か・・・どうなるかな・・・」

「そうだね・・・勝たないとやばいもんね」

妹紅が上から聞いてきたのでそつ答える。あ、美波が幽香に「プログラミスト喰らつてる・・・あとムツツリーー美波のスカートの下を」そつとしない

「それなら僕が相手をしよう」

「あっ、あれは!」

「やはり来たか。現学年次席、久保利光」

復活するのはやいな・・・あれ? 久保つて・・・

「大丈夫だよ明久」

「そうね」

「私達が守るから」

「私達も手伝いますね」

「何から?」

4人ともどうしたんだろう・・・

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

「構いません」

「やばいな・・・」

「なにが? 雄一」

「前のテストで二人の差はそこまでなかつたんだ。もし万が一のことがあつたら・・・」

「大丈夫だろ」

妹紅がはつきりとそう言つた・・・

「何を根拠に・・・」

「見てればわかるさ」

「それでは4試合目開始してください」

「「サモン! ! !」

総合科目

Aクラス 久保利光 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希 4409点

「な、何だと! ! ?」

「差が400オーバーなんて・・・」

「いつの間に・・・」

「あれ代表にも匹敵するんじゃ・・・」

Aクラスの「反応す」いな・・・

「先生、合図を」

「あつ…！し、失礼…」

先生、さつきから驚きすぎです・・・  
なるほど確かに妹紅がの言うとおりだね

「ぐつ…！姫路さん、この短期間にどうやってそこまで強くなつた  
んだ！？」

「私、このFクラスが好きなんです！誰かの為に一生懸命になれる  
このクラスの皆が！」

うん・・・確かに一生懸命だね嫉妬面では・・・

「Fクラスが好き？」

「はい！だから、私は頑張れるんですつ！」

「どうしても、僕も負ける訳にはいかないつ！」

なんとか拮抗してるので

「やあつ！」

「あつ！？」

姫路さんの大剣が久保君の大鎌を真つ二つにへシ折り、すかさず左  
腕を相手召喚獣に向けて翳す。  
あ、あれは・・・

『シユボツ』

腕輪の能力を発動させ、ほぼ零距離から放った熱線砲。成す統べな



「氣にするな

さて行こうかな・・・

「ちょっと待つた～～」

するといきなり乱入者が・・・

「な、だれ「問題ないさね」が、学園長！？」

「今回の実験のスポンサーだよ

うん・・・何となくわかつてたけど・・・

「紫・・・空氣読もうよ・・・

・・・ハア

## 第23話 Aクラス戦3 燃え尽きたか・・・(後書き)

まさかの咲夜の登場を妨害して登場した紫。

この作品での紫は基本ダメっ子です。

あとアンケート結果ですが

・台詞の前には名前をつけない

- ・映姫の外見は17歳（明久くらい）程に決定しました  
アンケートにお答えいただきありがとうございました

第24話 Aクラス戦4 説明（前書き）

さて説明と明久の能力が・・・

## 第24話 Aクラス戦4 説明

「あ、『めんなさい』ね。私は八雲紫と言ひて幻喰獣のシステムの制作担当の一人よ」

まあ、ちよつと記憶をこじつてそつなつてるけど関わってるのは確かだね・・・

「な、製作者だと」

「でもなんで・・・」

「あ、なんでここにいるかといつと新システムの実験を頼んでる子たちがいるからその説明よ。つことで吉井君、カモン」

・・・なんていうか・・・

「話は別としてふざけた行動をしないでください」

「話は聞いてたけど空気を読んでください」

慧音、永琳言いたい」とありがと

「えっと、八雲さ「ゆかりんでいいわよ」ふざけないでください」

「うう・・・」

「あ、Bクラスの壁ありがと」「わこまく」

「気にしないで」

「じゃあ紫さん説明お願ひします」

「分かつたわ」

「今回だけどちよつと幻想郷関係者である貴方に頼みたいの」

「今回のあの学園長の考てるシステムひとつしても危険だと言つて

るんだけど聞かなくてね」

「教育者としてどうなんですかそれ…」

「で、それを疑似的に作るために明久に頼みたいことがあるの」

「なんですか？」

「一つは直死の魔眼を発動しないこと、これは実験と表して境界をいじるからそれを殺されたら困るからよ」

「うん」

「もう一つは明久の能力を押さえてほしいの、理由はさつき言ったとおりね」

僕に能力の一つで、「あらゆる状況下で我を貫く程度の能力」と言うのがありこれは、

認識しさえすれば、時が止まろうがその影響を受けないのだ。咲夜の能力が効かなかつたのもこれのおかげ。あと自分自身で考えれば思考を読まれるのを拒否したり、幻覚等も効かず、紫の境界制御すら効かないはつきりいてチート的能力だが難点もあり、認識できていないと発動しなし、物理的?なものは防げないし、自分自身にしか意味がないのだ。

「わかつたよ、それだけ?」

「ええ、ところで私の境界の力は役に立つてるかしら?」

「うん、荷物とかの持ち運びにすぐ」

「・・・ほんと無欲よね・・・」

「そりかな?結構貪欲だと思つけど・・・」

そしてもう一つの能力、それは「力を共有し昇華させる程度の能力」  
・・・『あの子』いわく、こちらは僕が本来もとから持つてている能  
力らしい。

これは相手と力を共有しその力を使うことができる物である。力は  
はつきり言って固定的意味はなく技術力や魔力等も共有して身につ

け自分自身に合わせて昇華してしまつ。志貴さんとの修行はこれのおかげでかなり早く覚えた。

ただし身につけるためには、理解し、その行動を行い、それを受けることが条件であり、妹紅の「死なない程度の能力」などは覚えることができない。また相手が拒否した場合力の共有は行えない。

(明久の能力がわかりにくい場合は明久のキャラ紹介を)

「後ファイードバックだけど20%ほどつくわ・・・」

「うわ・・・けがしたらホントどうするんだろ?」

「ええ・・・しかも困ったことに追加だからはつきり言って明久は40%近くのファイードバックを食らひつてことよ」

「・・・もう何も言わない」

「もう咲夜にも伝えてるけど合図したら「イリュージョン」って言つてちようだい」

「なんで?」

「それらしく見せるためよ」

まあいいか

Fクラス陣

ある程度省いて雄一達に説明した。

「で、明久どうだった」「なんかちょっと用意がいるみたい」「しかしあの婆あほか?」「婆つて・・・言いすぎだよ」

まあ確かに言いたくなるけどね

「用意出来ましたので5人目の方、前に」

「いつでくるね」

「行つてらつしゃい」

「気を付けてくださいね明久君」

慧音・・・心配なのはわかるけど・・・

「逝つてこい」

「ハア・・・・・」

境界のずれたフィールド

「『めん待たせたかな?』

「いえ、待つてないわ明久」

「じゃあ・・・・」

「『樂しもうか(しみましょう)』」「『

side 雄一

「明久が負けるのはわかってるし、あいつがボロボロになるのを楽しむかね(笑)」

「イツ学習しないのかな・・・・

「吉井君なんだか楽しそうですね・・・・」

「そうね、お仕置きが必要かしら・・・・」

「 「 「 「 またか、またなのか！吉井の野郎！…」「 「 「 「  
「 どつちかといつとお仕置きが必要なのはあなた達よ」

あいつ等は幽香に任せよつ

「坂本、あんたの予想だけど確實に外れるよ  
「何？」

「教科は何にしますか？」  
「えつと古文で」  
「では召喚していくぞ」  
「「サモン…」」

古文

Aクラス 十六夜咲夜 613点

「 「 「 「 な・・・・！？」「 「 「 「  
「な、なんだよあの点数！？」  
「さつきの土屋つてやつを超えてるぞ…！  
「てが代表でも無理なんじや…」

Aクラスの反応す”いな

「な、化け物かよ…」  
「あんなのアキに勝てるわけない…」  
「吉井君…」

ハア…

「何言つてんのさ…」

「そうね・・・

「「明久は」」

そして明久の点数が遅れて表示された

「「あれよりもすごいよ(わよ)!!」」

Fクラス 吉井明久 684点

「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」ええええええええ!!

学園が揺れた

## 第24話 Aクラス戦4 説明（後書き）

まあ普通に考えて永琳のところで勉強してたんですから・・・  
点数はほぼ適当です

番外 キャラ紹介 吉井明久（前書き）

主人公のキャラ紹介です

## 番外 キャラ紹介 吉井明久

吉井 明久

読み よしい あきひさ

能力：『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』『力を共有し昇華させる程度の能力』

スタイル 身長は170程度 ほつそりしているが鍛えられている  
外見：茶髪に濃い茶色の目、それなりに美形に分類される

召喚獣の能力：『スタイルチェンジ』

100点を消費して武器、外見が変化する。最初はランダムだが一回発動させるとそのあとはコストなしで武器は変換可能。  
しかし外見（服）は一回になると変えることができない。あと低い確率だが『大当たり』が存在する。

点数：永琳から教えてもらっているためどれも高い

口調：年相応

能力について

『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』

認識していれば時が止まつていようがその影響は受けず、意識すれば心を読むことも、幻術にかけることも、境界などをいじることすらも拒否できる。

しかし気づいていることが条件で不意打ちや認識できていない状態だと発動せず、また物理的干渉については拒否できない。しかし、命になどが危険にさらされるような物理的なものは除く干渉には自動的に発動する。指定は自分自身のみ。

この能力は靈夢の能力を昇華したことにより身につけたのではない  
かと思われる。（明久はこれが自分の能力だと思っていた）

『力を共有し昇華させる程度の能力』  
明久が元から持っている本来の能力。

相手と力を共有する能力。また共有した力は使うことができる。

力に制限はなく、他人の能力もだが魔力等もさることながら、技術

力ましてや生命力等も共有できる。

しかし相手側から拒否されると共有できない。

また能力や技術力に関しては自分に合わせて昇華させることにより身につけられる。

しかし、認識、見る、行つ、感じる等条件があり、妹紅の『死ない程度の能力』など条件が無理なものは覚えられない。

#### 『直死の魔眼』

本来は違うらしいが今のところはこれで表現する。

物の死を見ることができる目。これが読み取つて視覚化するのは單なる生命活動の終了ではなく、意味や存在における「いつか来る終わり」、「死期」、「存在限界」であり、「存在の寿命」そのものである。直死の魔眼所有者にとって「死」は黒い線と点で視認され、強度を持たない。魔眼所有者がこの「死」を切つたり突くと、対象（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。

しかし明久に關しては狂氣など、精神等にも干渉できるらしく、志貴いわく「似ているが全然違うもの。性質が悪ければ直死の魔眼より上位の魔眼」らしい。

今のところ共有しているもので分つているもの

七夜の技術 永琳の才能（劣化版）身体能力 直感

#### 『空を飛ぶ程度の能力』

『魔法を使う程度の能力』

『気を扱う程度の能力』

『剣術を扱う程度の能力』

『境界を操る程度の能力』（境界を開くことしかできない）

『あらゆる薬を作る程度の能力』

『怪力乱神を持つ程度の能力』（劣化版、せいぜいコンクリートを碎く程度）

設定：基本は原作と変わらないが頭は良い。しかし天然で時折すごいボケをかます。

ある意味ねじが抜けており、慧音の正体等聞いたり見たりしても「だからどうした」というほど神経が図太い。またあまり怒らずとも優しいが、怒ると手がつけられず、昔暴走した時幻想郷の最強勢が総出で止めにかかつたが止まらないほどである。しかし無敵というわけではなく、負ける時は負ける。

夢想天生を発動した状態の靈夢と戦うことができ、殴り合いになるなどどうしても明久に分があるため、今のとこ事実上幻想郷最凶。努力家でもあり、仲間のためなら自分すらも犠牲にする。が本人いわく「けがとかは気にしないけど死ぬつもりはさらさらない」らしい。

後なぜだかわからないが幻想郷の住人いわく彼には嘘などがつけないらしく、胡散臭いといわれる紫ですら彼と話しているときは胡散臭くないそうだ。

そしてやっぱり鈍感。それなりに性に興味はあるが相手が嫌がることはしたくないので表だつては出さない。

主な使用武器はナイフの七ツ夜。一応ほぼすべての武器が使用可能でナイフ投擲技術なども高い。素手による格闘も美鈴との組み手で得意としている。

首に制服等で隠れているがひし形をした結晶のついたネックレスをいつもつけている。

番外 キャラ紹介 吉井明久（後書き）

書きなおし、追記ははしていく予定です

第25話 ▲クラス戦5 メイドと執事？（前書き）

分割  
後アンケートあります

## 第25話 Aクラス戦5 メイドと執事？

s.i.d.e 妹紅

古文

Aクラス 十六夜咲夜 613点

VS

Fクラス 吉井明久 684点

いや～やつぱり高いな…

咲夜の召喚獣だか外見はメイド服に犬耳と尻尾である（いぬせくや

「な、あ…あり得ない…」

「あの馬鹿の代表が600オーバーだと！？」

「ふ、不正じや…」

驚くのはいいが、最後の一入覚えてろよ？

「…藤原、どういう事だ？」

「見たまんまだ」

「でもアキがあんな…」

「明久は八意先生に勉強を昔から見てもらつてたのよ

「みんな馬鹿だの何だの言つてるけど、明久私達の中で一番頭良い  
んだよ？」

「…」

信じてないな

「…ならなんで隠してたんだ？それになんで今更…」

「別に隠すんじゃないくて目立ちたくないかっただけだろう」

「今日咲夜と本気でやると約束した、って言つていたわね」

「？あの一人一言も喋つてないぞ？」

「大体なら視線で会話出来るし」

「視線だけで…」

…羨ましいのは分かるが明久に殺氣むけるな…

side 明久

！？な、なんか美波達から殺気が…

「やはり明久に勝てませんでしたね」

「いや点数がすべてじゅないし分からなによ

紫を見ると扇子を閉じた…合図だね

「じゃあ」

「始めるようか」

「「イリュージョン…」」「

召喚獣が光になり僕達を覆い尽くす。そして光が消えると僕達の見た目（服等）は召喚獣と同じになつていった。

「召喚獣との融合か…」

「結構違和感あるわね…」

「動いて慣れよう」  
では、5試合目を開始します

માત્રા ફળિયાં

## 「スタイルチエングー！」

吉井明久 584点

光が僕を包み、手には七ツ夜を持ち服は…

執事服だつた

Г Г Г Г Г / / / / /

何でさ  
：

## 第25話 Aクラス戦5 メイドと執事？（後書き）

明久の幻想郷での話ですがこの作品の番外編見たいに書くか、別投稿で書くか投票してください

第26話 Aクラス戦6 人間最強▽Sありゆる意味で最凶（前書き）

時を止めるつてある意味人間最強ですよね

## 第26話 Aクラス戦6 人間最強VSあらゆる意味で最凶

s.i.d.e 慧音

とりあえず言いたい

「 「 「 戦う執事とメイドですね」 」 」

ん? どうも皆と意見が重なったようだな  
紫いわく周りに被害はいかないように結界が張つていいらしいが心  
配だな・・・

「・・・あれ本当にアキなの?」

咲夜と切り合つてる明久を見て島田さんがつぶやいた

「あの二人は獲物が似てるからね~結構仲いいんだよな・・・」  
「そうね、あの子たちたまに昔なじみじゃないのかしらと思つべら  
い息あつてるものね?」  
「え? ハ意先生どういうことですか?」

永琳の言葉に姫路さんが質問した

そうだつたなこの子たちは知らないのか

「ハ意先生もそうですが十六夜さんが吉井君にあつたのは中学生く  
らいの時なんですよ」

「そうね~ それまで上白沢先生が勉強等の面倒見てたものね  
「今でも見ていますが、ハ意先生には勝てませんからね  
「えつとどういふことなのじゃ?」

「あ、貴方達は知らないんだつたわね。八意先生は・・・天才といわれるほど秀才なのよ?」

月の頭脳といわれるくらいだからな

「「「「「・・・天才」」」

「医学もさることながら学者としても優秀。」このシステムの管理等も行つてゐるわね」

（（（（（この人なんで保健医してんのだ？）））））

「ちなみに保健医をしてるのは吉井君のためだからよ?」

「「「くそ！－！またなのか！？やはり処刑を・・・」」」

その意気込みを勉強に向けてほしいものだ・・・

「しかし明久達動き悪いな」

「多分体を慣れさせてるんじゃないから?」

「おいまて藤原、今何て言った?」

「だから動き悪いなつて言つたんだよ」

「な、あれでか!？」

まるで舞うようにナイフをぶつけあう一人・・・しかし

「確かに。吉井君、十六夜さんに慣れさせるためでしおうね。手を抜いてますね」

「え、十六夜さんが手を抜いてるんじゃなくてアキが手を抜いてるの!？」

この子たちの中で明久の扱いとはどんな物なのだろうか・・・

「・・・・・二人が止まつた」

みたいだな・・・あれは・・・

『『わあ、始めよつか（始めましょつか）――、楽しい死愛を――』』

「――慧音、幽香、永琳！――」

「分かつてゐるわ――」

「急ぐぞ永琳！――」

「ええ――！」

明久・・・本氣でやりすぎるなよ？

side 明久

結構打ち合つて、動きに慣れ始めたころ

十六夜咲夜 572点

V S

吉井明久 572点

「明久、もう結構慣れたし点数も同じみたいだからそろそろ本氣でやらない？」

「そうだね、あんまりちゃんとやつてたら後がつつかえちゃうもんね」

後一試合あるし、もう結構動けるから問題ないでしょ

「いくよ・・・？」  
「ええ・・・」

「「ああ、始めようか（始めましょ！）！－、楽しい死愛を－－。」

同時に僕たちは数本のナイフを投擲、そしてそれに突っ込むナイフが弾きあつのは分かり切つてゐる。所詮これは田へらまし

そして近くで対面した僕たちは

「ふつ－－！」

「はあ－－！」

『キンッ－－！』

互いにナイフを相手に向かつて切りはらつた

s.i.d.e 妹紅

『ゴウツ－－！』

「－－「う、うわあ！－？？」」

「ふう、間に合つたみたいね

「そうだな」

私と幽香はFクラス、永琳はAクラス、慧音は教師陣、紫は高橋先生と学園長の盾になるように前に出た  
あ、FFF団だつけ？吹き飛んじやつたな、まあいいか

「な、なによこれ！－」

「ん？ 気当たりだよ」

「な、気当たりだと！？」

ま、明久のだらうけどね。・・・結構ストレスためてたんだね・・・

・

「なんでお前ら平氣なんだ！！」

「それは感じ慣れてるからに決まってるじゃない」

「そそ。だからお前らの盾になつてるんだから」

「なんというかマンガみたいじゃのう・・・！」

「確かにそうですね・・・」

「ここまで口きけるなら大丈夫だろ…明久・・・勝てよ・・・

s i d e 明久

僕と咲夜は縦横無尽に駆けながら切り合つ

「・・・遅い！…」

「！？」

—閃鞘・七夜—

僕は急加速をし懐から斬りかかるも

「させません！…」

どこからともなくナイフが現れそれを妨害する  
ナイフの設置と制御、咲夜の召喚獣の腕輪の能力は指定した場所に  
ナイフを設置したり、ナイフの動きを制御する能力みたいで厄介だ

がいつものことなので気にしない

僕は壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら咲夜に切りかかり、咲夜はナイフの投擲と腕輪の能力を駆使し時には自分の時間を早くしてものすごい速さで突っ込んで切りかかってくる

「ふふ、やっぱりあなたとの戦いは楽しいわね」

確かに・・・でも隙だらけだよ

「切り裂くーー！」

「閃鞘・一拾掬威」

僕は急接近して咲夜に掴みかかり、逆手で僕側に切り払い、掬うよう切り上げしゃがむ用のナイフを流した・・・これならしゃがむことにより相手の視覚から消えたように見え追撃はできない！！

「くつーー！」

しかし咲夜も喰らって終わるわけではなく、受け身を取りながらナイフを投げてきた

「ちつーー！」

こつちが相手の点を削れば相手が、相手が削ればこつちが・・・

「幻符「殺人ドール」ーー！」

咲夜はナイフをばら撒き、そのナイフは咲夜の周りを回っていたか

と思つと僕に向かつて飛んできた

「散れ！…！」

一閃鞘・散華時雨一

無尽蔵にやるよにみえながらも僕は正確に刺突でナイフ落としていく。ちつ！何本か落としきれなかつたか！－

「斬刑に処す！…！」

一閃鞘・八点衝一

僕は咲夜に向かつて無尽蔵に斬撃をばら撒く

「くつ！？傷符」「インスクライブレッドソウル」

咲夜もそれに対して斬撃で対応してくるも数発かは当たる

「時符「イマジナリバーチカルタイム」」

そう咲夜が宣言した瞬間大量のナイフが現れる。

僕はそれを避け、時には弾き、潜り、飛び越えながら咲夜に近づき

「遅すぎるんだよ！…！」

一閃鞘・一風一

肘鉄を当て投げ飛ばした

「つづ・・・光速」C・リッシュ

な、くそこの狭い空間じゃあればきつこけど

### 一閃走・水月一

僕は反射しながら来るナイフのタイミングをずらすために壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら避けるも最後の最後でカスつてしまつ

「・・・やっぱ避けきれないね」

「・・・それだけ避けられれば十分だと愚づんだけど」

しかし・・・鍔<sup>つば</sup>すり合<sup>う</sup>いをしながら互<sup>ひ</sup>いに点数を確認する

十六夜咲夜 112点

VS

吉井明久 109点

微妙に負けてるな・・・

「咲夜、もう点数も時間もきつこし次の一撃を最後にしよう」

「そうね、明久・・・」

「なに?」

「勝つたらひとつ願いを言つてもいいかしら」

「うん、出来ることならね。でも・・・」

「そうね、勝たなきや意味がない」

僕達は距離を取る・・・

僕は水月で0からトップスピードに入り咲夜に接近する

「…………！」幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」

咲夜の周り全体を襲うようにナイフが飛び交う

「・・・・・」

しかし僕はまるで慣性の法則を無視したかのように急停止した

「なっ！？？」

急停止したことにより予想が外れたのだろう、ナイフは本来僕がいるはずだった目の前を通り過ぎる

そして僕はまた高速で接近にしながら消えうせた。そして

「」「」「え？」「」「

「なっ！？」

周りからの驚愕の声……そう周りや咲夜には僕が『2人』に見えているのだろう……

「・・・弔鬼八仙、」

一閃鞘一

地に伏せるように疾走する僕と、上空を飛ぶように舞う僕から同時に咲夜に向かつて斬撃が放たれる

「無情に服す・・・」

—迷獄沙門—

咲夜は棒立ちになり……僕は蹲るよつこじて現れる

「あつ・・・」

十六夜咲夜 0点 戦死

「し、勝者Fクラスです・・・」

静まり返った教室に高橋先生の声が響く・・・

あ・・・やばいな・・・意識が・・・この頃まともに自主練できなかつたし、フィードバックの影響かな・・・

僕はそのまま闇へと落ちて行つた・・・

第26話 Aクラス戦6 人間最強▽うあらゆる意味で最凶（後書き）

咲夜と明久の試合でした  
ちなみに死愛は誤字ではないのであしからず

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2653z/>

---

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月16日22時53分発行